



大学コンソーシアム学都ひろさき
令和3年度
活動報告集



ごあいさつ

弘前は5 高等教育機関をはじめ、多くの高等学校などが存在する文字通りの学都ですが、単に学生が多いだけでなく、弘前は「学都」と呼ばれるに相応しい風格のある街だと、他の街との比較ではなく、そう思います。加えて、学生は自転車があれば何処にでも行くことができ、「大学コンソーシアム学都ひろさき」の活動も弘前ならではの利点を活用して一層活発になるものと期待しています。

弘前の利点はそれにとどまるものではありません。弘前市からはコンソーシアムの活動に予算面や活動面での支援をいただいております、また、市民の皆さんの多大な協力をいただいております。なにより、大学に対する市民の期待にも大きなものがあると思いますので、大学としても地域との連携による教育研究の在り方を追究することに大きな価値を置いています。

いつも申し上げていることですが、特に大学における教育研究は多様でなければなりません。一大学の努力だけではなく、コンソーシアムを主体として地域の自治体や企業、団体の皆さんと連携して活動できることは、「学都ひろさき」に拠点を置く私たち5 高等教育機関にとって大きなアドヴァンテージです。そのことを最大限に活用して、未来社会を担う人材の育成に邁進していければと願っています。

「大学コンソーシアム学都ひろさき」の活動を多くの方々に知っていただき、引き続きご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

令和4年3月

大学コンソーシアム学都ひろさき会長

国立大学法人弘前大学

学長 福田眞作



目 次

ごあいさつ

令和3年度活動報告

I. 教育事業

●共通授業	1
○インターンシップ受入	32
●学生地域活動支援事業	36
・弘大囃子組（弘前大学）	36
・弘前医療福祉大学救急救命研究会（弘前医療福祉大学短期大学部）	40
・看護技術研究会（弘前医療福祉大学）	43
・Waku waku club（弘前医療福祉大学）	46
・成果発表会	52

II. 連携推進事業

●5大学合同シンポジウム	55
●各大学公開講座等助成事業	
・放送大学青森学習センター	57
・弘前医療福祉大学短期大学部	58
・柴田学園大学短期大学部	59
・柴田学園大学	60
・弘前大学	61
○新型コロナウイルスワクチン一括接種	63
○「大学発 地域振興券」	66

III. 学生交流事業

●学生団体シンポジウム～5大学 と 学生1万人 が弘前をつくる～	69
○ひろさき移動キャンパス	71
●学生委員会「いしてまい」活動	74

- 「令和3年度大学コンソーシアム学都ひろさき活性化支援事業費補助金」対象事業
- 大学コンソーシアム学都ひろさき自主財源実施事業

令和 3 年度活動報告

I . 教育事業

共通授業

1. 共通授業とは

「地域の課題を理解し、地域の発展を考える」をテーマに、地域の課題を具体的に理解しその解決について自ら考えることが出来る人材を育成することを目的に、オムニバス形式で開講している。本講義は平成25年度から開講しており今年で9年目となる。

また、平成28年度から本コンソーシアム加盟大学の弘前学院大学、柴田学園大学、弘前大学の3大学で本授業を単位として認定している。

2. 概要

○テーマ

地域の課題を理解し、地域の発展を考える。

○目的

青森の地域課題の解決や資源の活用の先行事例を学び、その意義や限界を理解し、地域課題の解決や資源の活用に関するプロジェクトを企画・実施をできるようになること

○内容

1日1課題（テーマ）について、担当教員、弘前市職員、民間企業社員等から地域の様々な課題についてご講義いただき、その解決策についてのグループディスカッションやグループワーク、フィールドワーク等を行い発表する。

○対象・定員

弘前学院大学、柴田学園大学、弘前大学の学生55名程度

○日時・授業数

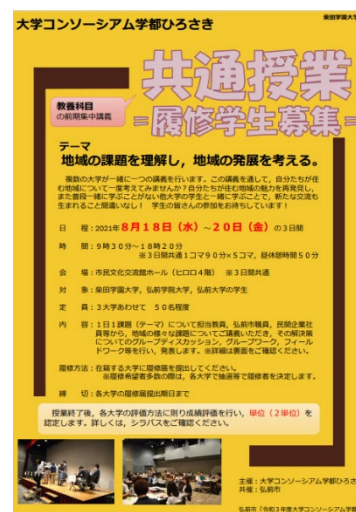
令和3年8月18日（水）、19日（木）、20日（金）

9時30分～18時20分

15コマ（1コマ90分×5コマ×3日間）

○会場（3日間共通）

ヒロロ4階 市民文化交流館ホールおよびZ o o m



令和3年度の募集ポスター

3. 受講者数

	18日	19日	20日
弘前学院大学	0名	18名	0名
柴田学園大学	12名	0名	0名
弘前大学	0名	0名	27名
計	12名	18名	27名

※合計 57名



令和3年度の受講者

4. 各日の授業

(1) 8月18日(水)

テーマ	弘前市の健康長寿と食生活
概要	地域の健康長寿において、生活習慣病の一次予防により、生活習慣病の新規患者数を減らすことは重要である。大学生を含む若年者は、食と健康の意識が低くなりやすいライフステージにあることから、まずは生活習慣病予防と栄養の関連を知り、自らの食生活を振り返る機会を設ける。また、弘前市の健康課題を知り、大学生にできる地域の健康づくりについて検討し、実践に至るまでの課題を意見交換する。
担当教員	柴田学園大学 生活創生学部 准教授 前田 朝美
ゲストスピーカー	弘前市 健康増進課 主 査 尾崎 弘子 氏
協力教職員等	弘前大学 人文社会科学部 教 授 森 樹男 柴田学園大学 生活創生学部 助 手 織田 夏海 弘前学院大学 社会福祉学部 准教授 藤岡 真之 弘前市 企画部企画課 主 査 工藤 翔
授業の流れ	【1コマ目】 9時30分～11時00分 ・導入(自己紹介・アイスブレイク) - アイスブレイク：絵文字ゲーム →スライドに表示された文字を見て何を表しているか皆で話し合う ・生活習慣病予防の栄養学(講義) ①クイズや実験で自分の食生活や健康観、食の情報とその実態などについて考える ②若者は血液検査をする機会がなく、気づかないうちに生活習慣病に近づく可能性があることを知る ③生活習慣病予防で大事な体調管理と食生活について知る →時間栄養学：いつ、なにを、どのくらい食べるか ④食生活を改善する意欲も大切なことに気づく →食材を使った実験を行い、気づきをあたえる
	【2コマ目】 11時10分～11時40分 自分の食と健康を振り返る(演習) ①食生活の自己評価をする(食生活自己チェックアプリを使用) →3コマで使用する「塩分チェックシート」の記入も行う ②個人&グループワーク1 - 評価表を見ながら、食生活の問題点を書き出し、班内で共有する ③個人&グループワーク2 ・大学生にはどのような食生活に対する問題が潜んでいるか話し合う ・食生活の問題を改善しようとしたときに、障害になることがないか考える

授業の流れ	【3コマ目】 12時30分～15時00分 ①地域の健康課題を考えるうえでの視点について ②塩分チェックシートの確認 ③弘前市の現状と健康課題(講義) 弘前市 健康増進課 主査 尾崎 弘子 氏 (弘前市の現状、健康課題解決のための取組、これからの取組) ④弘前市の実態を踏まえて4コマの演習内容を伝える
	【4コマ目】 15時10分～16時40分 ①地域の健康づくり新提案を考える(演習) ②グループワーク3 大学生目線で、地域の健康づくりプランを1つ考える 【プラン条件】 実現可能(時間、予算、人員など) 成果が期待できる(対象者の行動が変わる、検査値が良くなるなど) ～進め方～ 1. 司会者と記録者を決める 2. 「弘前市の健康問題」を各自で付箋紙に書く 3. 各グループで「弘前市の健康課題」を発表し合い、模造紙に付箋を貼り、健康問題を分析・整理し、グループ化する 4. 各グループで取り上げる問題を1つ選び、問題解決につながる対策(新提案)を考える ～ルール～ ・ 良い悪いは深く考えずにどんどん意見を出し合う ・ 他人の意見を批判しない ～スライドに入れる要素～ ・ 目標、実施者、対象者、アクセス、評価
	【5コマ目】 16時50分～18時20分 ・ 弘前市の健康長寿プランの発表 ①グループ毎にプランを発表 ②他グループに対する意見交換 ③各グループでもらった意見を基にして修正し、変更点を発表 ④協力教員講評 ⑤まとめ

授業の様子

==アイスブレイク：絵文字ゲーム==



このスライドが表す文章をグループ内で話し合っていた

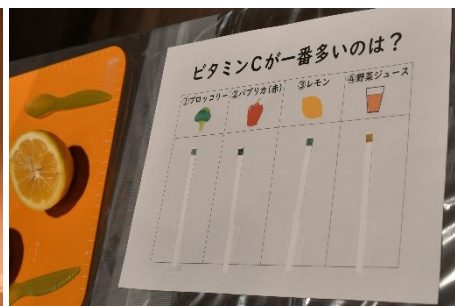
問題は合計3問あり、グループ内の雰囲気が和らいだ

「弘前市の健康長寿と食生活」について講演する前田先生



==生活習慣病予防の栄養学==

「どの野菜・果物がビタミンCが多いか」という実験で一部学生にも手伝ってもらった



緑茶と鉄分を同時に摂るとカテキンと鉄が結合し、変色している(真ん中)



お茶を使った実験をする前田先生と織田先生

授業の様子

==自分の食と健康を振り返る(演習)==



各自のスマートフォンで
食生活診断サイトの質問に
答えている学生たち

診断結果は右表の形で確認で
き、自身の食生活の問題点を発
見することが出来た



診断結果を基に自身の問題点を
書いてグループ内で共有し、
大学生の問題点と改善できない
理由を議論した

==弘前市の現状と健康課題==

(講演内容)

- ①弘前市の現状(健康/食の実態)
- ②健康課題解決のための取組
～高血圧対策の取組～
- ③これからの取組



尾崎氏の講演

授業の様子

==地域の健康作り新提案を考える==



①学生は自分の意見を付箋に記入し、模造紙に貼ってグループ内で可視化できる状態で共有

②出した意見をKJ法を使ってグループ分けし、提案するプランについて議論

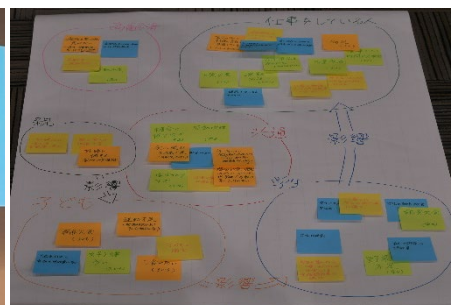
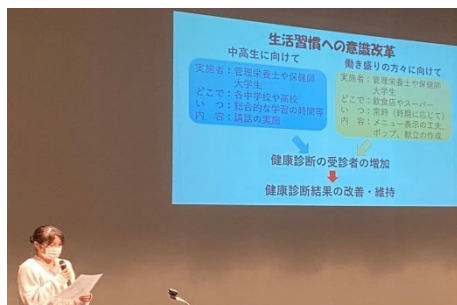


③グループ化した意見からプランになりそうな案を1つ選び、スライドを作成



==弘前市の健康長寿プランの発表==

模造紙の内容やその中から選んだプランについて発表



それぞれが異なる視点や考え方を持っており、提案内容が全グループ違うものとなっていた

授業の様子	 最初の発表に対する意見・感想を基にグループ内で話した改善点を発表
まとめ	前日にコロナ感染者数が増大したことにより、対面参加者を講師と同じ大学の学生のみで行うことになり、1日目は柴田学園大学の学生のみで行われた。最初は緊張が見られ、自己紹介やアイスブレイクでは同じ大学ながらも学科が違う人もいたため、手探りな様子や同じ学科の知り合いと話す姿が見受けられた。しかし、グループワークや話し合いを重ねていくことで、学生同士が談笑しながら話し合いに取り組む姿がみられ、積極的に意見を出すことが出来ていた。また、今回のグループワークの流れが「自分のことについて考える→グループ内で共有する→グループワークの課題に取り組む」というパターン化していたことも学生同士の話しやすさを生み出し、積極的な意見交換につながったと思われる。 授業の流れは、大学生である自身と身近な人の健康についての現状と問題点について理解し、そこから発展させて地域に暮らす人や自治体の取組について学び、「健康」という問題について考え話し合うというものであった。また、最後に健康課題の解決策を自ら考えることを通して、自身も健康課題への解決の手助けが出来ると気付かせるというものだった。 学生は、この授業を通して、地域の健康長寿には生活習慣病を防ぐことが必要だと理解できた。その上でどうすれば健康長寿が伸びるかを学習し、地域健康課題への向き合い方、1人からでも出来ることを構築していった。学生たちにとって、身近ではあるが蔑ろにすることが多い問題を学習し、解決策を検討することは良い機会であったと言えるだろう。

(2) 8月19日(木)

テーマ	病気をかかえる子どもの成長と援助の課題
概要	医療の進歩・発展に伴い、戦後多くみられた結核などの伝染病は、予防医学や治療薬の向上によって減少し、アレルギー疾患や生活習慣病が増加してきている。また、今まで救命できなかった小児がんや先天性疾患の子どもも救えるようになり、病気を持ちながら成長発達し、成人期に移行する時代となってきた。このような状況のなか、地域に暮らす子どもたちの状況、教育や保護者の問題など、大学生としてどのように考えていくか、学びを深め検討していく。
担当教員	弘前学院大学 看護学部 講 師 齊藤 史恵
ゲストスピーカー	弘前市 教育委員会学校指導課 課長補佐 福田 真実 氏 城東こどもクリニック 看護師長 赤平 幸子 氏
協力教職員等	弘前大学 人文社会科学部 教 授 森 樹男 弘前学院大学 社会福祉学部 准教授 藤岡 真之 弘前学院大学 文学部 講 師 齋藤 章吾 柴田学園大学 生活創生学部 准教授 小野 昇平 柴田学園大学 生活創生学部 准教授 前田 朝美
授業の流れ	【1コマ目】9時30分～11時00分 ①授業ガイダンス 講義の進め方やこのテーマで講義を行うに至った背景について ②齊藤先生の自己紹介 (看護師時代に新生児集中治療室(NICU)で勤務していた話など) ③病気をかかえる子どもの成長と援助の課題(講義) 子どもに対する医療の現状 小児の権利、特徴、発達について
	【2コマ目】11時10分～12時40分 ①健康障害と共に生きる子どもと関わる(講義) 城東こどもクリニック 看護師長 赤平 幸子 氏 ・講義とエピペン講習 エピペンとは何か? エピペンを使う上での注意点 エピペンが必要な理由 ②個人ワーク 子どもたちの身の回りで問題になりそうなことを挙げる ③グループワーク グループ内でお互いに自己紹介、個人ワークの意見交換

授業の流れ	【3コマ目】 13時30分～15時00分 ①子どもと病気と学校と（講義） 弘前市教育委員会学校指導課 課長補佐 福田 真実 氏 ②グループワーク 地域に暮らす対象の子どもと親はどのようなことを求めているのか、大学生として地域の子どもたちの援助と課題について考える
	【4コマ目】 15時10分～16時40分 ①グループワーク ・子どもがかかえる問題についてその問題の根拠と共に考える ・考えられた問題に対して私たちができる取り組みとは何か ・普通とは何か ②発表準備 ・話し合われた内容を発表のためにパワーポイントに記載する ・発表へ
	【5コマ目】 16時50分～18時20分 ①発表 病気と子供について講義で学んだことを活かして、グループワークで考えたことを発表 ②各先生方からの講評、総括
授業の様子	==講演== 「病気をかかえる子どもの成長と援助の課題」というテーマで授業を行う 齊藤先生
	==講演== 健康障害と共に生きる子どもとの関わりについて講義を行う 赤平氏

授業の様子

==エピペン講習==

エピペンとは、アナフィラキシーが起きたときにその症状の進行を一時的に緩和し、ショックを防ぐための自己注射薬のことである。エピペンについての講習後、各グループでエピペンの使い方を実践した。



エピペン講習で齊藤先生からエピペンの使い方を学ぶ学生



==個人ワーク==



感染対策をしつつ個人ワークに取り組んでいる様子

子どもの身の回りで起きそうな問題について考えている

==グループワーク==



グループワークでは、病気を抱えた子どもが持つであろう問題とは何か話し合った

授業の様子

それぞれの意見の中で同じ意見がないか話し合っている様子



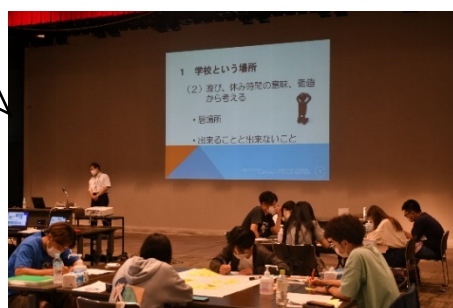
グループ内でリーダー、書記、タイムキーパー、ワーク進行係に役割分担して取り組んだ

出た意見を付箋に書いて出していく学生たち。リーダーを中心として話し合いを進めていた



学校という場所について、子どもも教員も皆が同じ価値観を持っているわけではないと話す、福田氏

福田氏の講義を聞き、子どもたちにとっての学校の意義について考える学生たち



授業の様子

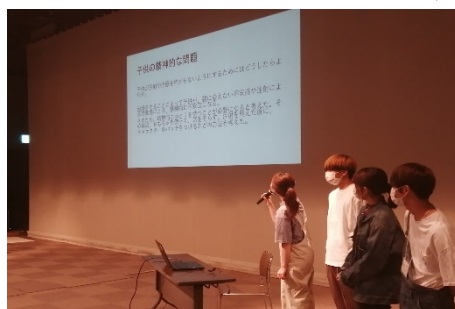


グループワークの内容を
発表用スライドにまとめ
て発表に備えている様子

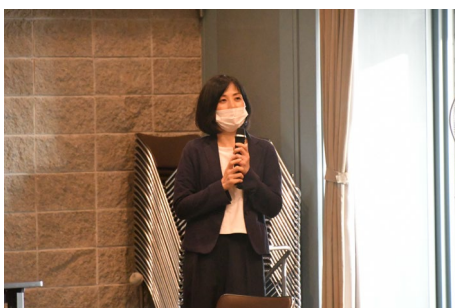
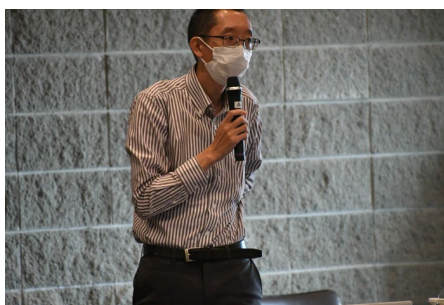
各グループの代表が集まって
発表の順番をじゃんけんで
決めた



==発表==



グループで話し合われたことについてパワーポイントを使って発表
した。病気の子もがかかえる問題には周囲の環境の改善、病気に
対する大人の理解を求める意見が多く挙がった。



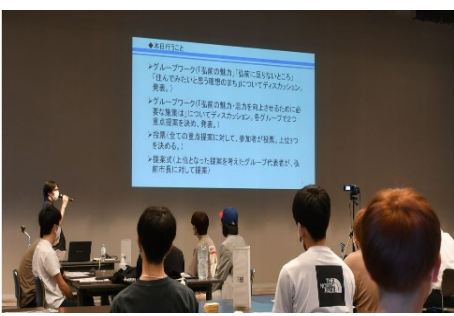
本日の授業全体に対する
講評を行う先生方

まとめ	2日目の講義では担当の齊藤先生だけではなく、城東こどもクリニックの赤平氏や弘前市教育委員会の福田氏による講義もあったため、様々な先生方の視点から子どもと病気について考えることができる機会となった。 学生は、齊藤先生の講義では病気をかかえた子どもの現状、特徴、発達について学び、赤平氏の講義では、病気が子どもに与える影響や病気をかかえた子どもとの関わり方、アナフィラキシーやエピペンの使い方について学んでいた。また、福田氏の講義では、病気の子どもの日常生活を送るうえでどのようなことを考えて過ごしていたか、本人たちの気持ちになって考えてみたり、それを見守る教員の立場になって考えてみたりしていた。 グループワークでは各グループで役割分担をし、リーダーが中心となって話し合いを進めていた。1回目のグループワークでは皆それぞれ自分の席に座って控えめに話し合っていたが、2回目のグループワークになると立ち上がり集まって話し合ったりして議論がより活発になっていた。授業の最後に、3名の講師の話をふまえて「病気をかかえた子どもの持つ問題にはどのようなものがあるか」「地域に暮らす子ども、家族にどのような関わりができるのか」「普通とはどのようなことか」についてグループワークが行われ、「精神的に不安定になる」や「病気をかかえた子どもが過ごしやすい環境づくり」、「周りと区別されることなく過ごすこと」等、自分たちの意見を述べた。
------------	---

(3) 8月20日(金)

テーマ	若者にとって魅力あるまちづくり
概要	学生の視点から「若者にとって魅力あるまちづくり」や「住んでみたいと思う理想のまち」、「弘前の魅力」について、全国各地の先進事例や弘前市の中期計画を踏まえ、グループワークを通して弘前市の重点施策を作成する。講義の最後に作成した重点施策を若者からの意見として弘前市長に提案する。
担当教員	弘前大学 教育学部 講 師 蒔 田 純
ゲストスピーカー	弘前市 企画部企画課 総括主査 猪 股 豪 氏
特別参加	弘前市長 櫻 田 宏 氏
協力教職員等	弘前市 企画部企画課 課 長 白 戸 麻 紀 子 弘前市 企画部企画課 課長補佐 青 山 洋 蔵 弘前市 企画部企画課 主 査 齋 藤 佳 太

協力教職員等	弘前市 企画部企画課 主 事 佐藤 祐介 弘前市 商工部商工労政課 主 事 神 直也 弘前大学 人文社会科学部 教 授 森 樹男 弘前大学 教育学部 准教授 新谷 ますみ 弘前学院大学 社会福祉学部 准教授 藤岡 真之 柴田学園大学 生活創生学部 准教授 小野 昇平 柴田学園大学 生活創生学部 准教授 前田 朝美
授業の流れ	【1コマ目】 9時30分～11時00分 ①新しいアイデアの作り方（講義） ・講師自己紹介、本で行うことについて ・各グループで自己紹介、アイスブレイク ・新しいアイデアのつくり方 (点と点をつなげること、人を動かすアイデアについてクイズ形式で紹介)
	【2コマ目】 11時10分～12時40分 ①弘前市のまちづくりの施策について（講義） 弘前市企画部企画課 総括主査 猪股 豪 氏 ・弘前市のまちづくりについての現状と課題を踏まえて政策を紹介 ・まちづくり・地域活性化策について概要説明 ②他の自治体の事例紹介（講義） (シェアリングエコノミー×地方創生 等)
	【3コマ目】 13時30分～15時15分 ①グループワーク 1. 弘前の魅力について 2. 弘前に足りないところ 3. 住んでみたいと思う理想のまち 各グループに市役所職員がメンターとして助言 ②発表 ③政治について施策立案のヒントについての説明
	【4コマ目】 15時25分～16時40分 ①グループワーク 1. 弘前の魅力・活力を向上させるために必要な施策 2. 弘前市後期基本計画に盛り込むべき内容 ②新たなグループで意見交換 ③新たなグループでもらった意見を元のグループで共有、再度検討 ④各グループで重点施策を2つ挙げ、発表スライドを作成

授業の流れ	【5コマ目】 16時50分～18時20分 ①重点施策発表、投開票 ・各グループ2つの重点施策について発表、質疑応答 ・出された重点施策に対して、参加学生が1つ選び投票 ②結果発表後、上位3つの施策を弘前市長に提案 ③弘前市長による講話 ④講評、総括
授業の様子	==授業についての説明== 「若者にとって 魅力あるまちづくり」 を担当する蒔田先生 本日举行うことについて 説明する様子   今日の流れ ①グループワーク ②重点施策発表 ③投票 ④市長へ提案 ==アイスブレイク== 《積み上げ型自己紹介》 名前、出身地等 「隣の〇〇さんの隣に座 っている私の名前は〇〇 です。」   “実は〇〇” 話に 興味津々な学生 実は一日にお米を五合 食べてます

授業の様子

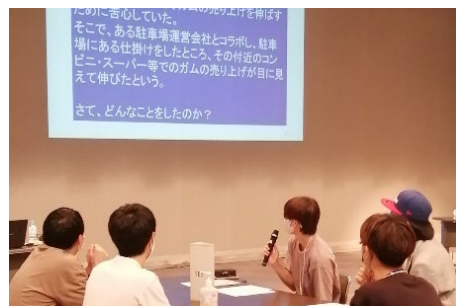
==新しいアイデアの作り方の説明==

点と点をどうつなげていくのかを固定概念にとらわれずに考えていくことや、人を動かすためのアイデアとして人の誘因性、持続性等を刺激することの他、クイズ形式を用いて新しいアイデアで成功した事例について考えていった。



点と点をつなげるためには頭を柔らかくし、固定概念にとらわれず問題の枠外で答えを求める

蒔田先生に質問し、新しいアイデアによる成功事例を考える



人を動かすアイデア

- ①本の整頓の事例
- ②ガムの売上と駐車場の事例
- ③串のポイ捨て減少事例

==弘前市のまちづくり施策について==



猪股氏の講義

弘前市の政策・取組について紹介

- ①健康・医療
- ②雇用
- ③農林業
- ④環境・エネルギー

授業の様子



==弘前の魅力・足りないところについて話し合い==



ポリポリ村のアニメーションを BGM に、弘前の魅力、足りないところ、理想のまちについてグループで話し合う。

「弘前の魅力」

→ごはん屋さんが多い、ねぷたまつり、宵宮が盛んである

「弘前の足りないところ」

→雪の除雪、歩道が悪い

「住んでみたいと思うまち」

→休日の過ごし方に困らない、子育て支援充実

==弘前の魅力向上のための施策の話し合い==

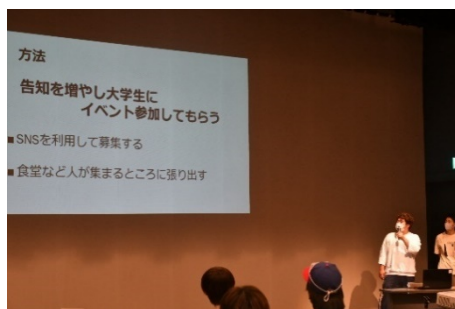


弘前市の魅力向上のために必要な重点施策を各グループ2つ考える

新しいグループを形成し、各グループの重点施策について意見交換を行い、元のグループで再び再検討する。



＝重点施策の発表、投票、市長へ提案＝



発表の様子

各グループの重点施策

- | | |
|---------------------------|-----------------|
| ① リンゴの木アスレチック公園 | ⑦ 夜を過ごしやすくする |
| ② リンゴの収穫・加工体験 | ⑧ リンゴを活かした観光施策 |
| ③ 学官連携で市のイベント情報を
学生に提供 | ⑨ 自転車に配慮したまちづくり |
| ④ 通学路の段差解消 | ⑩ 球場、ライブ会場となる施設 |
| ⑤ 土手町商店街を
若者も楽しめる場所へ | ⑪ 温泉施設のスタンプラリー |
| ⑥ 新たにキャンプ場をつくる | ⑫ 気軽に使える多目的スペース |

授業の様子

ひとり1つ施策を選び投票

上位3つは…

- ・ 通学路の段差解消
- ・ 気軽に使える多目的スペース
- ・ 学官連携で市のイベント情報を
学生に提供

学生の投票の様子



選ばれた上位3つの施策
を弘前市長へ提案発表

授業の様子	弘前市長へ提案書を渡し、写真撮影 ==市長より講評== 共通授業や市政について、 お話しいただく 櫻田市長
まとめ	3日目の講義では、学生は多くの場面でマイクを持ち発言する機会があったことにより、積極的に楽しく授業に参加出来ていた。また、グループワークも打ち解けて話を進められていた。 猪股氏による講義では、弘前の現状と課題、現在行われている施策について述べられた。それらを踏まえたグループワークでは、弘前の魅力、足りないところについて、学生自身が弘前に住んで感じたことが多く挙げられた。その後の発表では、自らの経験談などを踏まえた発表がなされ、同じ事象であっても各グループで捉え方が異なっており、グループで特色があることが浮き彫りとなった。 最終発表は、各グループで若者視点の魅力あるまちづくりとは何なのかを考え、重点施策を2つ発表した。他のグループからの質問や意見が飛び交い、活発な議論が行われていた。この発表に対して行った投票で選ばれた上位三つの施策を弘前市長に発表した。このことは学生たちには貴重な経験になったと感じられる。 授業全体を振り返ると、三日目が参加者の人数が一番多く、グループワークでも多くのアイデアが出ており、賑やかな雰囲気、学生も今後の弘前市について何が必要なのか活発な議論を行っていた。

5. 単位認定者

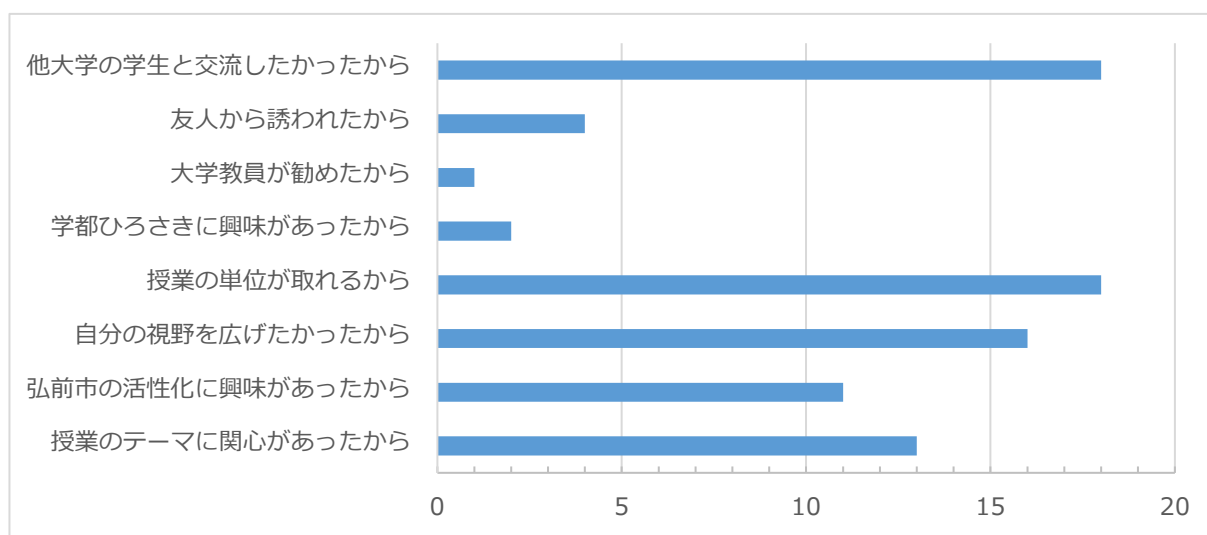
- 弘前学院大学：17名
- 柴田学園大学：12名
- 弘前大学：26名

6. 授業アンケート

- アンケート実施期間 8月23日（月）～27日（金）
- 回答者数／出席者数 37名／57名
- 回答率 64.91%

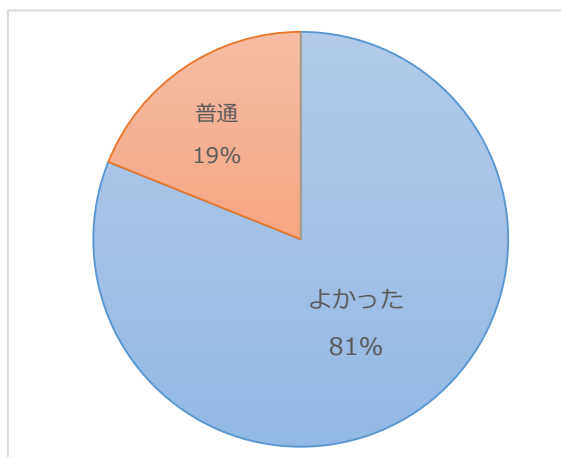
【今年度の各授業について】

○なぜ授業に参加しましたか。（複数回答可）



○1日目テーマ「弘前市の健康長寿と食生活」について

	回答数
1. よかった	30
2. 普通	7
3. よくなかった	0
計	37



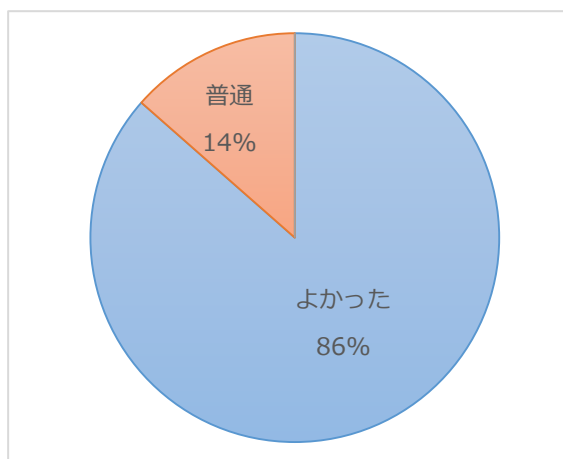
○1日目の意見・感想等（一部抜粋）

- ・授業を受けて、自分の普段の食事について振り返ることが出来たし、栄養学科との交流で栄養学科目線の考えと、子ども発達学科目線の考え等、様々な意見がでて、とても興味深かった。

- ・食生活に関する意識が変わった。
メディアと前田先生が話していた知識や正解が自分とっていたものと違い、やはり自ら行動して知り、健康を守っていく必要があると実感した。また、勘違いしてる人が多いためきちんとした知識を浸透させる必要があると思った。
- ・オンラインだったが、高血圧を中心とした健康問題について知ることが出来た。
- ・話題が食生活ということで、日常でも耳に入ってくる情報はあったが、詳しく分かりやすかったので理解が深まった。
- ・食に興味が無かったが、健康寿命と深く関わっていることを学び、食生活を意識しようと思った。
- ・私自身は弘前出身ではなく神戸出身であるのでそこまで塩分であったり寿命のことを必死に考えることがなかったがこの授業でより体の健康は必要なのだと改めて感じた。また普段から食生活に対してはかなり気を使っていたが最近は一入暮らしということもあり野菜を摂取することが少なくなってきた。そのためこの授業自体がもう一度自分の身体との対話にもつながったと考える。
- ・自分の考えやほかの人の考えを深く掘り下げて、より現実的な活動になるような話し合いができ、とても有意義な時間だった。私が普段学んでいる分野ではないものだったので、初めて知るような内容が多く充実した学びができたように思う。
- ・青森県は短命県だと言われぬように若いうちから健康についてもう一度考え直せる機会ができたと感じる

○2日目テーマ：「病気をかかえる子どもの成長と援助の課題」について

	回答数
1. よかった	32
2. 普通	5
3. よくなかった	0
計	37



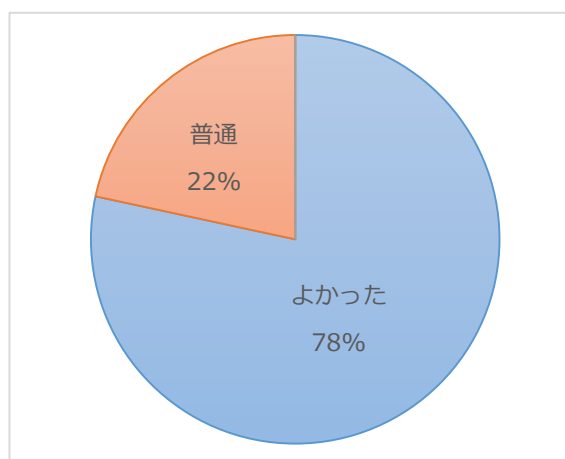
○2日目の意見・感想等（一部抜粋）

- ・病気や障がいを抱える子どもたちがどのように健康な人と一緒に生活していけるのかを考えるいい機会になった。病気や障がいの人と捉えるのではなく、一人一人ときちんと向き合っていく大切さと難しさを知った。様々な人を支えられる、一緒に楽しく生きられる支援をできる人になりたいと思った。
- ・内容は難しかったが、病気にかかる子供たちの現状などが分かり参考になった
- ・自分の知らなかった、弘前市の課題がわかったので、弘前市で生まれ育って来た自分が、しっかりと貢献出来るように積極的に地域の活動していきたいと思った。

- ・ 先生の話し方がとても頭にスッと入ってきて聞いていて分かりやすかった。
- ・ 普通とはなにか考えるいい機会になった。
- ・ 入院していなくても通院だったり薬だったりで治療している子どもが近くにいるんだと知った。大人と違って小さい子どもは体の変化を上手く言葉で説明できないから関わり方を考えていきたいと思った。
- ・ 生育限界についてや早産の障害をもつ確率など、自分から気にしないと気づかない、知らないままの内容であったと感じた。感覚運動期、前操作期など別に書かれている内容など初めて知る内容が多かった。
- ・ 医療従事者を志す者として、とても興味深い内容だった。
- ・ 私も白血病を患っていたので自分の病気に関して身近に起こっても不思議ではないと感じたし、もっと周りに理解が深まれば良いなと感じた
- ・ 会場で参加することはできなかったが、テーマに興味をそそられていたので、是非参加してみたかった。今まで生活習慣病を罹患している患者へ視点を置いて夢や目標を考えていたが、子どもへ視点を置くことで新たな発見がたくさんあり、とても良い機会になった。

○ 3 日目テーマ「若者にとって魅力あるまちづくり」について

	回答数
1. よかった	29
2. 普通	8
3. よくなかった	0
計	37



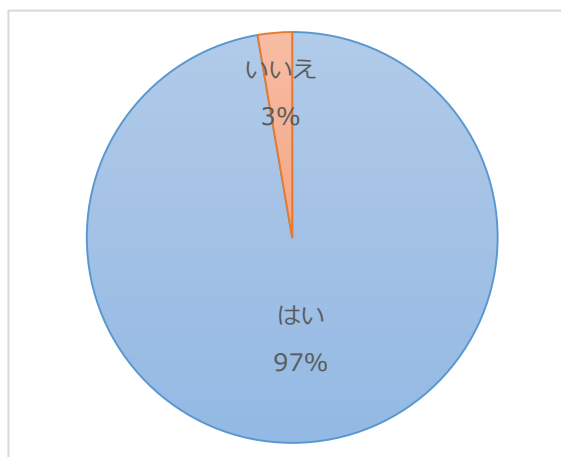
○ 3 日目の意見・感想等（一部抜粋）

- ・ 幅広い年齢の人が共存する中で、未来を作るのは若者であるし、ほかの年代の人を支えるのも若者であるから、1 番は若者が集まり、活気溢れるようなまちを作る必要があると考えるきっかけになった。また、大人がどれくらい大学生や高校生の意見に耳を傾け、一緒に協働してくれるのか気になった。
- ・ 色んな市の事例を羅列されても頭に残らない。もう少し自分でも考えたかった。
- ・ グループで出てきていた意見が、自分も弘前で一人暮らししてみて感じていた事だった。これから少しでも改善してもらって弘前がいい所なんだと言える部分が増えたらいいと思った。
- ・ グループワークを盛り上がらせる蒔田先生の講義がとても良かった。内容としても、自分はアイデアを考えるのが苦手なので、良い経験になったと思う。
- ・ 若い世代がまた活気溢れるような魅力などをアピール出来るイベントなどが出来ればいいなと思った。

- ・よくない所を改善するのは必須だが、それをしたところで普通の街で魅力があるかどうかはまた難しい問題だと感じた。
- ・動画の音質が悪くなくてあまりわからなかった。私は弘前が地元ではないが、弘前には魅力がたくさんあると思うので、その魅力を余すことなく発信していいと思う。
- ・この授業は実際に対面で受講できたのでとてもよかった。青森は都市ではないため都市とは違った青森の見せ方があるのではないかと考える。例えば自然であったり季節であったりと魅せ方は様々あると考える。私自身大都市ではないがそれなりの都市に生まれたため都市自体には特に憧れはない。しかし、人口流失がかなり激しいこの現状はやはり青森にはとても大きな事態なのだと考える。そういった意味では若者が若者による街づくりといった授業はとても面白かった。
- ・シェアリングエコノミーという言葉を知った。新しい経済の動きは、インターネットが発達する現代の活動として有益なものだと思った。必要な人が簡単に利用できるという点がこの活動の良いところだと感じる。
- ・弘前市の課題と魅力について考えることができ、地元だけでなく、様々な地域の人の意見を交流することができました。まちを魅力的にするには、新しい建物を建設したり、新しい企画を考えたりするなど1から新たに取り入れる施策だけでなく、交通の整理や地域イベントの活性化など元々あるものに少し工夫を加える方法も効果的であると感じます。今後は発信していくツールにも注目しアピールしていくことも重要であると感じました。

○授業を通して地域の課題に興味を持ちましたか。

	回答数
1. はい	36
2. いいえ	1
無記入	0
計	37



【「はい」と回答した理由】（一部抜粋）

- ・自分の町について知っているつもりでも知らない事が多く、それらを学ぶのは楽しかったから。
- ・青森県は、短命県という課題があったり、その中でも味が濃いものを好むことや、生活習慣病などある。また、たくさんの美味しい魅力のある食材があるいいところだと思うので、どのように地域を活性化させるかなど、たくさんの課題があり、解決できると思ったから。
- ・なるべくはやく課題を改善していく必要があると思ったし、自分に関係ないじゃ済まされないことばかりだったから。地域の課題は子どもたちに大きく影響するから、未来の子どものために課題を解決していきたいと思ったから。

- ・今まで自分のことや家族のことにしか考えていなかったか、地域やその他の課題に今何が必要なのかを改めて考えることが出来たから
- ・今回の講義で、地域には良いところも多いが改善すべき点もあることがよく分かった。今後、地域をより良くしていくために活動したいと思うことができる授業内容だった。
- ・自分たちの知らないところで多くの人が頑張っていることを知って、その頑張りに県民が答えていけないと感じたから。
- ・選ばれた段差はどこの道でもありえることで、地域の課題がすぐ近くにある、自分から注目しないと気づきにくい物であったから。
- ・自分の住む地域が、弘前よりも過疎化が進んでいるから。
- ・弘前市の現状を学び、様々な課題があることを知り、自分が普段生活していく上では気づけない課題が多くあることに気づきました。市民の食生活や病気を抱えることにも課題があることは今まで気にすることがなかったため、新たな視点で物事を考えるきっかけとなり、授業では扱わなかった弘前市の課題や解決策などに興味を持ちました。
- ・私は県外から来たけれど弘前市が好きだし、弘前大学に入学して良かったと思っているため、弘前市の問題が少しでも解消してほしいと思うから。そして、現在の課題に対し、看護学生として今後の実習に生かせることがあると気づいたため、微力かもしれないけれど自分も力になりたいと感じたから。

【「いいえ」と回答した理由】

- ・なぜ「いいえ」を選択したのかというと私はここの地域課題はとても若者だけでは解決できないという考えたからだ。事実県外からくる学生が多い中何故青森に残らないのかというやはり都市に憧れたり、実家に戻る人が多いのではないかな。また青森自体自然としてはかなりいい環境ではあるが世の中としてはと考える。書いてある文章は否定的であるがだが青森のことは嫌いではなくむしろ好きなのでそこはわかってほしい。

○あなたが考える地域の課題を記入してください。（一部抜粋）

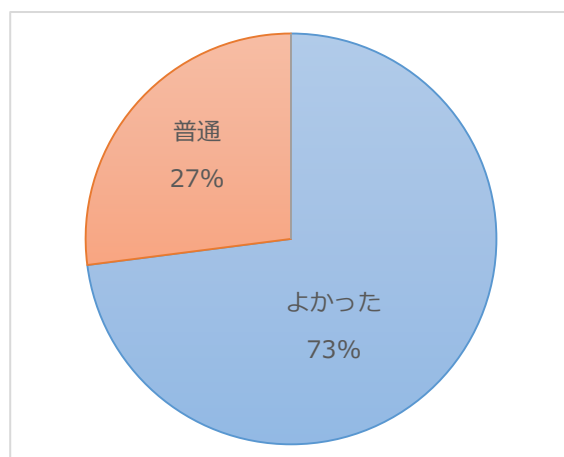
- ・短命県 1 位であるということ。子供のうちに形成された生活習慣は大人になってからはなかなか変えることが出来ないの、子供のうちから正しい食習慣、生活習慣を身につけることが青森県全体の課題だと思う。
- ・少子高齢化と言われているけど東北は塩分の摂りすぎと言われているから、その食生活に対してどのような食べ物がいいかなどを地域全体で話し合い、どんな調理方法でやれば塩分の摂りすぎを制御出来るかなどを理解して、塩分の摂りすぎに対しての地域全体の意識の甘さが課題にあると思う
- ・交通マナー、高血圧、健康意識の低さ
- ・障害者や、病気を抱えている人が安心して暮らせるように何が必要なのか。また、安心した生活とは何か
- ・弘前は住みやすい土地だと思います。しかし、交通面で問題があります。歩道が狭かったり、道路の老朽化でアスファルトが割れて段差ができたりと、車を持たない学生やお年寄りが不自由な道路環境

だと思います。他にも、土手町の発展や学生が多い街なので手軽で安いお店が沢山あれば良いなと思いました。

- ・やはり都市への公共交通機関が必要だと考える。青森事態はあっても弘前にはない。また弘前に来るのにも青森市から往復約 1000 円は少し手痛い考える。であるなら、青森市の観光だったり八戸市にて青森の観光をする人が多くなるのではないかと考える。桜ばかりに頼っているのではなく他にも弘前にまた来ようと思わす事業やイベントが必要だと考える。よって私は都市からの公共交通機関が必須となると考える。
- ・弘前市は大学があるため、県内でも学生が多い地域であるが、その強みを活かしたイベントが少ない。
- ・若者が都会に出て行ってしまうこと。
- ・病気の二次予防に繋がる健康診断の受診率がとても低いこと。また、糖尿病による死亡率が全国で最も多いことから、食生活の改善や子どもの頃からの食育活動の普及が必要であること。自治体や会社独自で実施するのではなく、学生との連携により、活性化が進むと考えた。
- ・ヒロロ前の歩道の段差

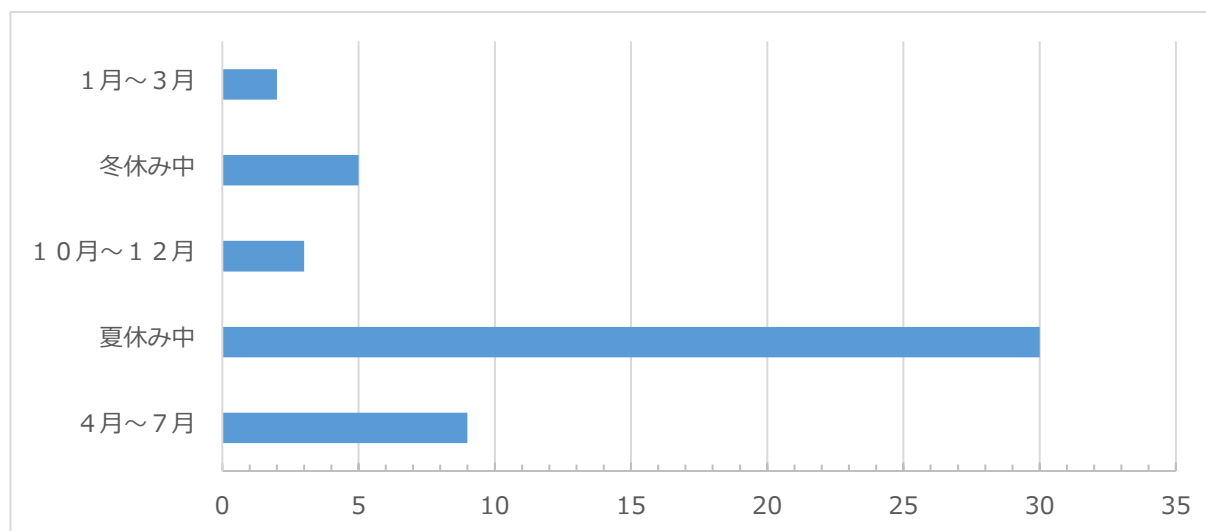
○グループディスカッション・発表の時間割り振り等について

	回答数
1. よかった	27
2. 普通	10
3. よくなかった	0
計	37

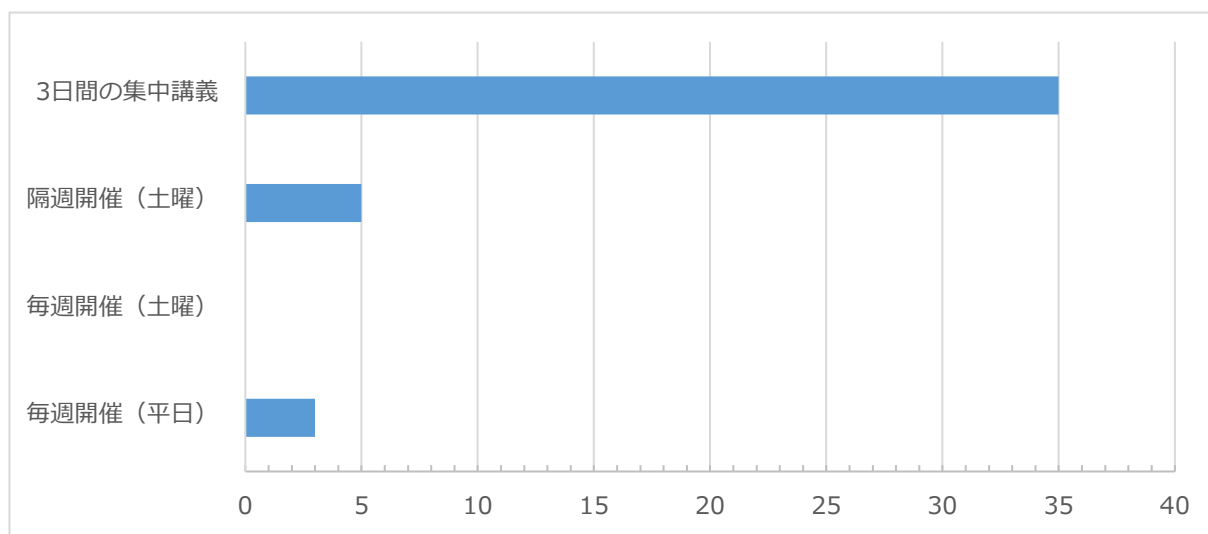


【来年度の授業について】

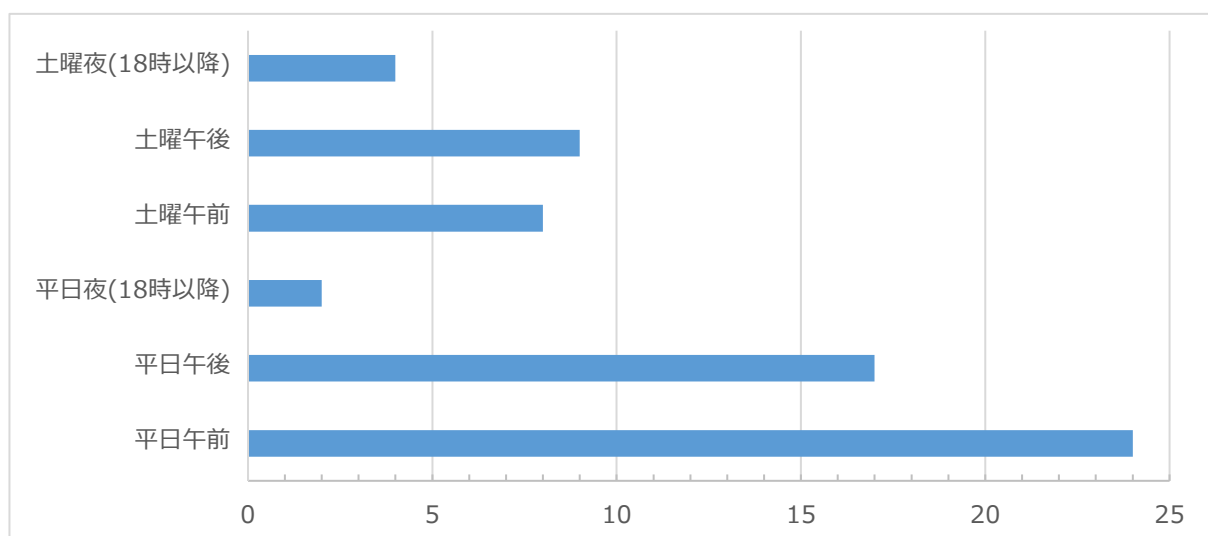
○開催時期について、あなたが望ましいと思う時期について教えてください（複数回答可）



○開催形式について、あなたが望ましいと思う開催形式について教えてください（複数回答可）

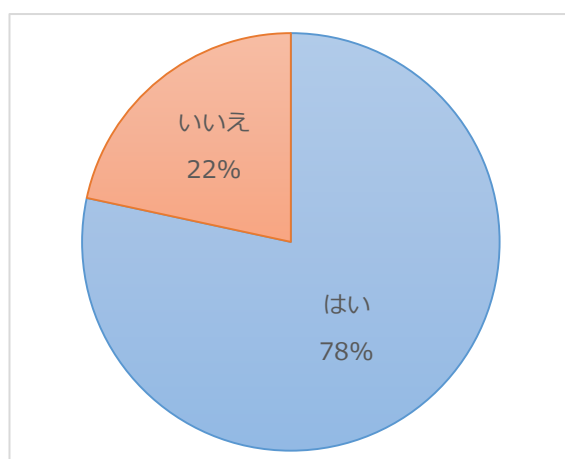


○開催時間について、あなたが望ましいと思う時間について教えてください（複数回答可）



○今回の講義内容・形式の場合、同級生や後輩に勧めますか。

	回答数
1. はい	29
2. いいえ	8
計	37



【「はい」と回答した理由】（一部抜粋）

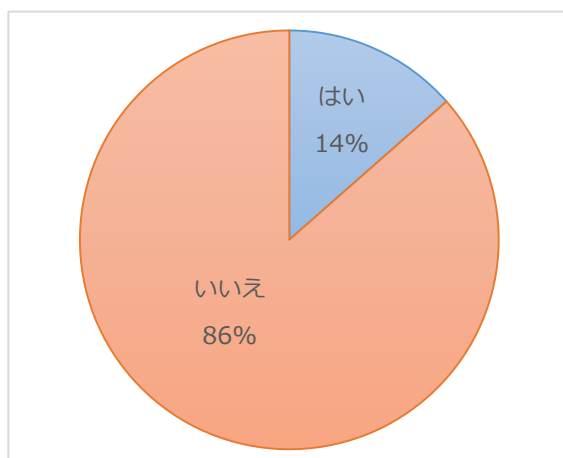
- ・私たちは、コロナの影響で交流できなかったけど、他の大学と交流し、様々な意見を交換しあうのはなかなか出来ない貴重な機会だと思うから。そして、新しい発見など、多くの利点を得ることが出来ると思う。
- ・普段地域のことなどを考えることが全くないため、普段学べないことを学べる機会になるし、グループワークがある事で普段関わらない人と関わることができ、コミュニケーション能力も多少なりとも上がると思う
- ・講義内容は非常に興味深いものであったため、受講を勧めたいと考えた。しかし、今回は録画やオンラインでの講義もあり、あまり充実した形式ではなかったと感じた。対面での講義であるならばさらに良いと考える。
- ・他の学部越境はひどいものや使えないものが多いと聞くので、学びにもなり集中講義でもあるので。
- ・普段あまり発言できなくてもこの場にくると意見を否定されないから活発に意見交換ができて、良い経験になる。
- ・中身が濃かったから。
- ・普段関わらない学生たちと意見交換できることがいい経験になるし、自分では思い付かないことが、たくさん出てくるのがおすすめだから。
- ・他大学と交流しながら物事を決めていくことは将来でも役に立てると感じたから。色んな意見をまとめて発表する難しさや楽しさを感じて欲しいから
- ・他大学の人達と、グループワークを含めた色々な活動ができるから
- ・改めて様々なことを考えることができるから。

【「いいえ」と回答した理由】（一部抜粋）

- ・講義内容は充実していたけれど、他の学校の人との意見交換が出来なかったため、グループディスカッションであり多くの視点からの意見交換ができなかったと思うから。
- ・コロナ禍であった場合は勧めません。なぜならやはり他校の人と関わるといったことが重要になってくるのではないかと考える。また授業の形が急遽変わるのはこちらとしてもかなり面倒であるので教授同士がしっかりと話し合いができておらず情報の共有がしっかりとできていなかったのではないかと考える。そうなってくるとやはり後輩などに勧めるのは少し難しい。
- ・三日間で行うのがきつかったし、課題を1日に3つは多すぎるから。
- ・今回はコロナ対策のため3日中2日間がオンラインであり、後日動画を視聴する形であったため、授業の理解度が低くなってしまったり、他大学の人との交流ができず利点を失ってしまうため。
- ・やむを得ない理由だが、他の大学と意見交換をしたり、交流をしたり出来なかったから。
- ・グループディスカッションが少なく家で一人でやる課題もほかの講義と比べ多いから

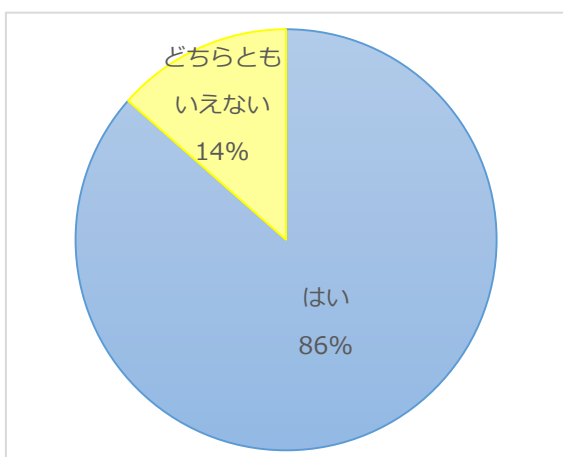
○これまでに他大学の学生と、授業や課外活動などを通じて、交流を図ったことはありますか。

	回答数
1. はい	5
2. いいえ	32
計	37



○今後も他大学の学生と交流を図っていきたいと思いますか。

	回答数
1. はい	32
2. いいえ	0
3. どちらともいえない	5
計	37



○授業を通して「よかった点」(一部抜粋)

- ・ 私たちは、他大学とは交流できなかったが、他学科との交流をしたのだが、栄養学科目線の意見などを聞けて、新しい発見が多くあったし、すごいためになった。私たちは子供にとってなにがいいかという、教師目線や子供目線の意見になってしまうが、栄養学科は専門的な栄養学をもとに意見していて、たくさんことを学ぶことが出来た。
- ・ 身近な事で、わかっていたと思っていたものが全然分かっていなくて、自分の考えを変えるいい機会になったから良かった。
- ・ その科目を専門的に学んでいなくても、講義を受けて地域の課題について理解し、具体的な解決策を考えることができた。
- ・ 全部の講義が終わったあと、グループワークの時間を設けてくれて、内容が頭に入った状態でグループワークをしたので、自分も含め、班のみんなもたくさんの意見を出せたので本当に良かったです。
- ・ 授業を通してよかったと思うのは普段触れることのできない弘前の問題であったりにまっすぐに考えることができ、それを他の人と話し合えることができるのがよいと思った。コロナということもあり、グルー

プでの活動自体がかなり少なくなってきたためそういう意味ではとても久しぶりに授業っぽいというか大学生っぽいものであると感じたため良かったと考える。

- ・まず、弘前の現状を知ることができる所です。自分が住んでいる街のことなので、沢山色んなことを聞くことができとても為になりました。次に、他の学部の人と話せることです。私自身、他の学部と交流が無かったので新しい友人ができました。その次に、授業の配信があったことです。何度も見直すことができるので良かったです。
- ・普段は聞くことができないようなお話を聞くことで、グループワークで色々な人と交流することができたところ。
- ・ほかの学科の人と同じ班になり、意見交換できたこと。同じ学科の人だと考え方や発想が似てくるが、違う分野を学ぶ人の考えを交えることでより、幅が広がったように思う。
- ・コロナ禍ではあったが、グループディスカッションを行うことが出来た。自分の考えや感じ方だけではなく、様々な考え方、視点でディスカッションを行うことが出来たため。
- ・他大学とは交流出来ず残念だったけれど、弘前大学の他学部の学生と交流できたことは嬉しかったし、弘前市について様々な視点から捉えることができ受講して良かったと思えた。

○授業を通して「よくなかった点」（一部抜粋）

- ・もう少し自己紹介の時間がほしい
- ・良くなかったことはない。しかし、授業が始まる前に3大学が集まっていたにもかかわらず、2大学をコロナの影響で帰らせるのは、せっかく電車などで来た方などに申し訳ないと思う。事前にメールなどで知らせることは出来なかったのか？と思った。
- ・もう少し講義時間が短い方が集中できた。
- ・コロナの状況だから仕方がないが、やはり他の大学の学部の人意見も聞いてみたかった。
- ・グループワークの時間が想定よりも短かったことがあまり良くないと感じた。もう少しグループで話し合いをして意見交換をしたいと感じた。
- ・今回はコロナ禍ということで、授業の配信がありました。配信があるのはとても嬉しいのですが、映像や音声聞きづらい場面が多かったです。特に三日目の映像と音声聞きづらかったです。そのほかは、特にありません。
- ・コロナの影響で急遽オンラインで行なうことになったので仕方ないが、当日にその連絡をされたので、もう少し早く連絡して欲しかった。
- ・出席してない日に使用された資料が画像として送られたが、それだとレポートを作成する際に見づらかった。紙のほうがやりやすいと思う。
- ・グループが別々になった時の主体性のなさ。リーダーシップ、メンバーシップが全く発揮されておらず、ディスカッションが捗らなかった。
- ・他大学との交流の意味がなかった。初日に会場に行った後に大学ごとに日にちを分けると言われ、1時間以上かけて通っている人間としたら非常に迷惑だった。ガソリン代もタダではないし。コロナにより急なのは分かるが、テストメールを送った際に一緒にそのことも送るべきではなかっただろうか。

7. 新聞掲載記事



東奥日報社提供
令和3年8月21日（土）21面



陸奥新報社提供
令和3年8月24日（火）17面

8. 授業の成果

今年度は、「弘前市の健康長寿と食生活」、「病気をかかえる子どもの成長と援助の課題」、「若者にとって魅力あるまちづくり」の3つのテーマで開講し、3日間とも趣向を凝らしたプログラムとなった。

本来は弘前大学、弘前学院大学、柴田学園大学の3大学が一堂に会して授業を行う予定だったが、授業前日に青森県における新型コロナウイルス感染症の感染者が過去最多を更新したことに伴い、緊急措置として「同一大学学生とのみの対面」と「オンデマンド方式」を組み合わせ、大学間の交流は行わない形式で開講することとなった。

受講した学生からは、普段の授業では学べない専門外の内容や、他学部も交えたグループディスカッションにより、講義を聞いているよりもコミュニケーションが取れ交流を深める良い経験となったようだ。また、「様々な視点から弘前市の課題を捉え直すことができ、対面時では他の人の意見も交えて話し合いができた。」「自身について考え直すことができる観点が多くあった。」「食生活や子供に対することを学び、新しい考えを多く持つことができた。」「地域を盛り上げていくにはどうすれば良いかなど普段の講義では触れないことを考えることができて良かった。」という感想が寄せられ、学生の自発性や自己啓発を促すことができた。

9. 次年度開講に向けての課題

対面開催を主軸におきながら、昨年度同様にオンライン開催の可能性も視野に入れ準備を進めてきたが、授業開始日直前に発生した青森県内の急激な新型コロナウイルスの感染者数増加に対して、講師と学生への連絡調整の時間を確保できなかったことから、止む無く対面&オンデマンド方式により開講する運びとなった。これにより、参加学生への連絡も当日の授業開始時となり、せっかく会場まで足を運んだ学生が連絡事項を聞いて帰ることとなり、迷惑をかける結果となった。また、本講義の最大の魅力である3大学の学生交流が失われることとなった。

次年度の新型コロナウイルス感染症の状況は不透明であるが、今回のように急な対応を迫られることを想定し、オンライン即時切り替えが出来るように今後は準備をしていく必要があると感じた。

編集・執筆

大学コンソーシアム学都ひろさき 事務局

インターンシップ学生

阿保 秀和（弘前大学）

花田 遼暉（弘前大学）

木村 優美菜（弘前大学）

立川 史織（弘前大学）

インターンシップ受入

1. 概要

○目的

具体的な事業運営を通じて、学生の企画立案力やマネジメント力を養うことに加え、自治体と大学コンソーシアムが連携することの意義を模索し、地域課題の把握、地域志向力の向上を目指す。

○業務内容

大学コンソーシアム学都ひろさが主催する、集中講義「共通授業」の運営業務

- ・事前準備
- ・当日運営
- ・授業終了後処理

○受入人数

弘前大学学生 4名

○期間及び時間

令和3年7月19日（月）～8月26日（木） 合計76時間程度

2. 業務内容

（1）事前準備

ガイダンス、名刺作成、挨拶まわり、共通授業会場下見、関係者による全体打合せ参加、授業の準備等



挨拶まわりの様子



「共通授業」打ち合わせの様子



共通授業に向けた書類の作成作業の様子



会場設営、準備の様子

(2) 当日運営

受付、授業の補助等



グループワーク中の学生に
助言する様子



授業に使用する機器を
チェックする様子



グループワークの様子



グループワーク中の学生に
助言する様子



投票ボックスの中身を
開票する様子



授業の内容をメモする様子

(3) 授業終了後

報告書の作成、インターンシップ終了報告



理事への
インターンシップ終了報告の様子



部長への
インターンシップ終了報告の様子



インターンシップに参加した
学生と事務局の方々

(4) インターンシップ参加学生の感想

○弘前大学人文社会科学部3年 阿保 秀和

私にとって大学コンソーシアム学都ひろさきでのインターンシップは非常に貴重な経験となりました。学生としてアルバイトでしか社会に出たことがなかったため、今回社会人とはどのようなものを身を持って体験することができ、それによって卒業後私がどのように働きたいのか、就職においてどのような点を意識すべきなのか、将来のビジョンを持つことができました。

今回のインターンシップでは共通授業の備品準備、計画、書類作成など幅広い作業をさせていただきました。1つの授業を行う上でも多くの作業があり、関わる人も想像以上に多かったため、

普段受けている授業に対してもその重要性、ありがたみをより感じるようになりました。また、共通授業の打ち合わせにも同席させていただいたのですが、その際には社会人が実際に行う打ち合わせの進行や質疑応答などを直に学ぶ良い機会となりました。

共通授業本番では新型コロナウイルスの影響で当初の計画とは大幅に異なる形での開催となりましたが、そのおかげで柔軟に対応する力を身につけられたように思います。

最後になりますが、インターンシップにあたってまだまだ至らない点も多かった私たちインターン生に社会人としての考え方をはじめ、多くのことを教えてくださった事務局の皆様、共通授業を無事成功させるために協力してくださった教職員、ゲストスピーカーの皆様に感謝の意を込めお礼申し上げます。

○弘前大学人文社会科学部3年 木村 優美菜

約1ヶ月のインターンシップ活動で、多くの経験と学びを得て自分自身の成長点と課題点を見つけることができ、良い経験となりました。インターンシップの活動を通して、自分がいつも授業を受ける立場であったため、授業を運営するという立場になり初めて、一つの授業をやるためには多くの事前準備が必要であることに気づきました。

業務に関しては主にパソコンを使った作業が多く、自分はあまりパソコンの機能について知らず至らない点もあったことで時間がかかってしまいましたが、他のインターン生と協力しながら資料を作成することが出来ました。

また、共通授業当日に関しては、周りの様子を見て主体的に動くという目標を持ちながら授業の運営に取りかかりました。しかし、主体的な行動が出来ていた部分もありましたが、助けてもらったことも多くあったことから経験が足りないと感じました。

インターンシップの活動を通して、これから自分が就職する際に何に気をつけて仕事をしていけば良いかなど、社会人としての意識を少しずつですが持つことが出来ました。この活動で見つけた自分の課題点については、残りの学生生活に改善していきたいと考えます。

最後に、インターンシップを受け入れてくださった事務局の方々には、大変お世話になりました。いつも優しく教えていただいたおかげで、気持ちを楽にして毎日のインターンシップの活動に取り組めたと思います。たくさんご指導いただき本当にありがとうございました。

○弘前大学人文社会科学部3年 立川 史織

今回の大学コンソーシアム学都ひろさきでのインターンシップを通して、私たちが普段大学生生活で受けている授業の裏では、綿密な打ち合わせや会場下見など事前の準備があり、多くの人の協力によって成立するものであるということを改めて実感することができました。

また、初日の朝に弘前市の新型コロナウイルス感染者の急増により会場で講義を受講する学生を制限することが決まるなどの突然のハプニングに対し少し動揺しましたが、事務局の方々と協力をしてグループの作成や机・イスの配置の変更などを行い緊急事態にも柔軟に対応することができたと思います。

私は、事前に円滑に授業を進めるために講義内のグループワークで話し合いが止まっているグループがあった場合、そのグループに入ってサポートをするという目標を立てていました。当日は、今までの議論の経験などを活かして参加していた学生に話し合いを進める上でのアドバイス

や一緒に案を考えるなど積極的にグループワークのサポートをすることができたと自負しています。

最後に、約1ヶ月間インターンシップ生として受け入れてくださった事務局のみなさん、ありがとうございました。お忙しい中、気さくにインターン生に話しかけてくださったことで分からないことをすぐに聞ける雰囲気を作って下さるなど丁寧に指導をして頂けたため、程よい緊張感の中でインターンシップに取り組むことができました。本当にありがとうございました。

○弘前大学人文社会科学部3年 花田 遼暉

今回授業運営として活動する中で、講師を務めるのは教員の方ですが外部の方々との連携やその他準備をすべて事務局の方で担っており、授業でも沢山の人が関わることで成り立っているということを知りました。

授業に対し自分なりに考え、様々な資料を確認して臨みましたが、当日授業を聞いていく中で次の自分たちの行動はどうしたらよいのかといった疑問が浮かんでいたため打ち合わせ時や前日に本番想定で物事を考えられなかったと反省しています。しかし、インターン生でありながら自分も一学生として先生方の話を聞いて、自分が普段とっている行動が駄目だと発覚したり、グループワークにおいての意見のまとめ方が自分になかった方法だったり、3日目には他の自治体で行っている施策について知ることが出来たりと知見が広がったので授業に参加してよかったです。

また、以前は最後まで考えずに途中で「大丈夫だろう」と考えていましたが、今回自分が担当する部分は迷惑をかけてはいけない、ということで何回も見返し、不備がないかを確認して、最後まで考えるということが少し出来るようになったと感じています。

最後に、インターン生として受け入れてくださった大学コンソーシアム学都ひろさきの皆様方には常にこちらを気にかけてくださったり、優しくご指導していただいたことにより、緊張しすぎることなく行うことが出来ました。約1ヶ月という短い期間ではありましたが本当にありがとうございました。

3. インターンシップ受入の成果

今年度は、弘前大学の学生4名をインターンシップで受け入れた。社会人の中に踏み込むことは、学生時代には緊張する場面でもあるため、始めは馴染めるかどうか事務局側としても心配はあったが、学生自身の向上心や成長が著しく、自然と良い関係を築くことが出来た。

特に共通授業に主催者側として参加することにより、自分たちが普段受けている側の授業の裏では、様々な人の協力があること、準備にも時間がかかることなど、貴重な社会体験をすることが出来たと、インターンシップ生自身も感じる事が出来ていたことは大きな成果だといえるだろう。

学生地域活動支援事業

1. 学生地域活動支援事業とは

学生が企画立案したまちづくり、地域づくりの活動に係る経費の一部を支援する公募型の事業である。地域課題の解決や地域の活性化につながる活動を支援し、学生による魅力あるまちづくりの推進を図ること及び地域活動を通じて、学生が地域の一員としての社会的力量を形成することを目的に実施する。

一定の申請条件を満たせば応募でき、応募された活動は本コンソーシアムが実施する審査を経て助成を決定する。

2. 各採択団体、事業及び実績報告

(1) 弘大囃子組（弘前大学）

1	事業名称
	青森県のお囃子を広めよう大作戦！
2	事業実施概要
	この事業の目的は学生や地域の人々に、青森県のようなお囃子の体験・演奏を通じてお囃子に興味・関心を持ってもらうということである。 地域課題は地域のお囃子の担い手の減少、囃子方の高齢化の進行により、地域のお祭りの囃子方の減少や地域のお祭りの勢いが無くなってしまうということだと考えている。そのために、我々がお祭りや地域のイベントに参加し、青森県のお囃子を演奏して、若者を中心とした地域の方々にお囃子を聞いてもらい、地域の人々がお囃子に興味を持ってもらう手助けをする。また、お囃子の演奏によってお祭りやイベントを盛り上げるということでも地域に貢献したいと考えている。 ヒアリング審査のコメントの「SNSを利用してお囃子について発信したらよい」という提案を受け、弘大囃子組のツイッターを活用して、練習の日程・様子（演奏の様子写真）、演奏先での写真などを積極的に発信するようにした。また、新しくInstagramを開設し、ストーリー機能を使って練習風景を発信するようにした。新入生はツイッターでの情報を見て練習に参加してくれたり、サークル活動に興味を持ってくれた人がいた。 お囃子への興味と関心を調査するために次のようなアンケートを実施した。 タイトル：地域のお囃子に関するアンケート 対象：弘前市立時敏小学校の伝統文化事業での演奏とお囃子の体験への参加者20名 日時：11月6日 年齢：7歳から19歳 問1 あなたはこれまでに地域のお囃子を実施したことはありますか。 問2 今後もお囃子の演奏を続けていきたいと思いませんか。 (問1で はい と答えた方) 問3 このイベントを通じて、今後地域のお囃子の演奏に挑戦してみたいと思いませんか。 (問1で いいえ と答えた方)

その結果次のような結果になった

問1 はい 8名 いいえ 12名

問2 はい 8名 いいえ 0名

問3 はい 11名 いいえ 1名

このアンケートの結果

これまでにお囃子を演奏した経験がある人は全員、今後もお囃子の演奏を続けていきたいと答えていた。また、これまでにお囃子の演奏をしたことがないと答えた人で、お囃子の演奏を聞いたり、楽器に触れる体験を通じて今度お囃子の演奏に挑戦したいと答えた人は12人中11人だった。

このようにアンケートの結果を見ると、お囃子の演奏の体験をしてもらったほとんどの人が今後演奏に挑戦してみたいと感じていたことが分かった。

この事業の中で計7件の依頼・イベントに参加した。依頼・イベントを通じてでは小学生から大人の方、日本人だけでなく外国人の人にもお囃子の演奏を聞いて、また体験してもらえた。地域の人々に、青森県の様々なお囃子の体験・演奏を通じてお囃子に興味・関心を持ってもらい、地域の人々とお囃子を結びつけるという事業の目的は概ね達成することが出来た。

3 事業実施報告

実施スケジュール

日 時：7月19日

イベント名：弘前ロータリークラブねぶた例会

参加者：7人

内容：弘前ロータリークラブの宴会での演奏

事業統括者：横倉辰紀

日 時：7月21日

イベント名：弘前大学教育学部附属特別支援学校での依頼

参加者：3人

内容：こどもねぶたの演奏手伝い、演奏の体験

事業統括者：愛宕加菜

日 時：7月31日、8月1日、7日、8日

イベント名：富田清水ねぶた愛好会の演奏手伝い

参加者：7月31日4人、8月1日6人、7日7人、8日13人

内容：弘前れんが倉庫美術館での演奏

事業統括者：横倉辰紀

日 時：8月1日、5日

イベント名：弘前市鍛冶町でのねぶた運行の依頼

参加者：1日10人、5日10人

内容：弘前市鍛冶町でのねぶた運行の演奏手伝い

事業統括者：黒澤光

日 時：8月8日、9日、11日、12日、13日

イベント名：弘前中三での演奏依頼

参加者：8月8日10人、9日10人、11日7人、12日8人、13日7人

内容：弘前中三一階ホールでの演奏

事業統括者：横倉辰紀

日 時：11月6日
 イベント名：弘前市立時敏小学校の伝統文化事業での演奏とお囃子の体験
 参加者：15人
 内容：時敏小学校でのお囃子の演奏と実際に楽器に触れる体験
 事業統括者：小川佳香

日 時：11月6日、7日
 イベント名：学生シンポジウムの動画撮影の依頼
 参加者：6日5人、7日6人
 内容：動画出演のための演奏
 事業統括者：黒澤光

※参加者について囃子組からの参加人数を記載

4 補助金による支援の効果

- 「弘前市立時敏小学校」や「弘前大学教育学部附属特別支援学校」での演奏体験に必要な楽器類の作成や譜面の大量印刷及び配布を行うことが出来た。
- 自転車や徒歩での運搬が難しい和太鼓等について、タクシーを活用し安全に運ぶことで多くのイベントを実施する手助けとなった。

5 反省点・改善点

演奏を聴いてもらうよりも、なるべく楽器を触ってお囃子を体験してもらうようにしたかったが、楽器を触って体験してもらう活動が2件（弘前市立時敏小学校の伝統文化事業での演奏とお囃子の体験、弘前大学教育学部附属特別支援学校での依頼）しか設けることが出来なかった。感染症防止の制限などの理由はあるが、出来れば今度は演奏だけでなく、依頼先に交渉してより興味・関心をもってもらいやすい楽器に触れる体験をもっと積極的に行っていきたい。

6 特記事項（自由記載）

特になし。

7 事業実施時の写真

日 時：7月31日、8月1日、7日、8日
 イベント名：富田清水ねぷた愛好会の演奏手伝い



日 時：11月6日

イベント名：弘前市立時敏小学校の伝統文化事業での演奏とお囃子の体験



日 時：8月8日、9日、11日、12日、13日

イベント名：弘前中三での演奏依頼



日 時：11月6日、7日

イベント名：学生シンポジウムの動画撮影の依頼



(2) 弘前医療福祉大学救急救命研究会（弘前医療福祉大学短期大学部）

1 事業名称
弘前市内の小中学生を対象とした防災・救急教室
2 事業実施概要
本事業は弘前市内の小学校5・6年生を対象とした防災救急教室で、主に発災後の対応や平時からの災害に対する備えに加えて心肺蘇生法や止血・固定法といった自らの命を守るための防災・救済に関する知識の向上が目的である。 自然災害が多発する日本において、日常生活と防災は切っても切り離すことが出来ない存在である。比較的災害が少ないと言われている弘前市においても、昨年9月に観測史上最大の降雨記録を更新し、住宅の浸水被害も多数報告された。これらの災害に対して防災訓練を実施し対策を講じる必要があると考える。近隣の小学校でも防災訓練は実施されているが防災に特化した知識を学ぶ機会は少ない。そこで、学外で被災したときの対応や日常生活における備えについて本事業で実施することにした。 一概に自然災害と言っても多種多様である。私たちは、過去の災害から弘前市は特に豪雨災害が多いことを踏まえて「地震・豪雨災害」にスポットを当てることにした。2011年、東北地方に津波による甚大な被害をもたらした東日本大震災からヒントを得るために2021年8月に岩手県被災地視察（野田村、宮古市、田老町、陸前高田市等）を実施した。ここから得られた知見を本事業内容へ反映し、防災ワークシートに落とし込んだ。さらには、豪雨災害から逃れる方法を伝えるとともに参加記念品として豪雨対策6点セットを配布した。 本事業実施前後にアンケートを実施したところ「弘前市防災マップで居住地域を確認していますか？」という問いに対して事前アンケートでは「確認していない」と回答した人がいたが、事後アンケートでは全員が「確認した」と回答した。市内約5万6,000世帯に弘前市防災マップが配布されているが、居住地域の浸水する可能性を把握していない人が一定数いたことがわかる。続いて、「居住地域の避難先を家庭内で共有していますか？」という問いに対して事前アンケートでは「共有していない」という回答が一定数いたものの、事後アンケートでは「共有している」という回答が100%にまで増加した。このことから、本事業を通じて弘前市防災マップを家庭内で共有する機会が設けられたことが示唆された。次に「弘前市で災害が起きた時、何か不安はありますか？（複数選択可）」という問いに対して「通信手段の遮断」の回答率100%と最も高かった。スマホなどネット環境の発達によって便利な社会ではあるが、私たちはそれに依存しすぎているのかもしれない。災害時には災害伝言ダイヤルの使用や、平時から家族で避難場所を共有しておくことが大切だと言える。次いで「食品の備蓄」「ライフラインの遮断」「避難場所での活動」が同率で83.3%。次いで「空き巣など防犯上の問題」が50%と最も低い結果となった。宮城県警は、東日本大震災発生から半月で窃盗による被害は約280件に上ると発表した。そのうち空き巣が約70件だったことが分かっている。このことから災害に備えた対策も必要であるが、同時に災害時の防犯対策も忘れてはならないことが分かる。 本事業によって私たち学生が教える立場に立つことで正しい知識を身に付ける必要があり、防災・救急に関する知識をブラッシュアップする機会になった。また、専門的で難しい内容を小中学生に対していかに分かりやすく説明するか試行錯誤することで伝える力を身に付けることができた。 岩手被災地視察では、地震や津波の恐ろしさを肌で感じる事ができた。施設や被災地を巡るだけでなく語り部の方や当時現場にいた消防職員の方にお話しいただいたことで、より詳しい状況を知ることができた。私たちはこの視察を通して10年前の出来事を繰り返してはいけない、そして後世に伝えていかなければならないことを痛感した。 救急救命学科に所属する私たちにとって本事業は、相手に分かりやすく物事を伝える力はもちろん、災害の恐ろしさを後世に伝える役割を担っていることに気づかされた。

3事業実施報告

①具体的な事業報告

弘前医療福祉大学短期大学部にて、市内小学校の５・６年生７名を対象に防災救急教室を実施した。

申込人数：９名

参加人数：男子２名　女子５名　計７名（２名欠席）

②構成員の具体的な人数や役割

構成員：弘前医療福祉大学短期大学部救急救命学科の学生２４名

事業統括責任者：遠藤匠

事業統括副責任者：菊地陸斗・大川蓮

広報担当者：坪田京花・今泉愛果

経費管理担当者：木村駿介

③実施スケジュール

令和３年

６月上旬

ヒアリング審査

８月１日～８月３日

岩手被災地研修実施

８月２６日

全体での事前練習／実施日を１０月１６日に変更

９月１８日

実施日を１１月３日に変更（最終決定）

１０月１日

青森県新型コロナウイルス感染症緊急対策パッケージ解除に伴い教育委員会に事業ポスターを配布（申し込み開始）

１０月３０日

募集締め切り

事前アンケートの実施

１１月１日

全体での事前練習

１１月２日

全体での事前練習及び会場設営

１１月３日

事業実施

１１月１０日～

報告書作成

事後アンケートの実施

１１月１０日～令和４年２月

成果発表会準備

4補助金による支援の効果

補助金の交付によって段ボールベッドや簡易トイレ等の防災用品を実際に展示することができた。さらに、当日までに複数回のデモンストレーションを行うことで失敗することなく事業を終えることができた。

支出の大半を占めた炊き出し体験訓練では、豚汁、アルファ化米や鯖缶ハンバーグといった災害時の食事を実際に調理して食べることができたため、補助金による支援の効果が非常に大きい。

また、参加記念品の「豪雨対策６点セット」の購入によりその日から災害対策備蓄品として自宅で保管できるグッズの配布できたことも補助金による支援があったからである。

5反省点・改善点

反省点としては、保護者同伴での参加を検討すべきだった点である。今回は新型コロナウイルス感染拡大に伴い、規模縮小や感染防止の観点から小学生のみで開催を企画した。市内の感染状況を考慮し、事業実施日の延期を繰り返し最終的には11月3日の開催となった。申し込み件数は9件のみだったが、少人数であれば保護者同伴の参加も可能であったため、申し込み件数に応じて臨機応変な対応ができればより大きな効果が期待できた。

改善点としては、申し込み人数に応じた臨機応変な対応に加えて、充実した事業内容かつコロナに影響されない開催方法を模索できれば、満足度の高い事業、参加者数の増加や早い段階での周知及び開催に繋がった。今後、同様の事業を開催する際には上記の反省点・改善点を活かし、より満足度の高い充実した事業を目指したい。

6 特記事項（自由記載）

新型コロナウイルス蔓延下において本事業の開催をととても悩んだ。本来であれば9月に実施する予定だったが、青森県内でも新型コロナウイルス陽性者数が増加していたため開催日を10月に延期した。しかし、県内の状況は回復せず青森県新型コロナウイルス感染症緊急対策パッケージが発令された。これにより、小学校の学校行事が規模縮小または中止せざるを得ない状況にあることを知った。そこで私たちが学生地域支援活動を通して学校行事に変わるイベントを開催したいと考え本事業の実施を企画した。

申し込み期間等を考慮して11月に開催することを決め、9月30日の新型コロナウイルス感染症緊急対策パッケージ解除後に市内小学校に教育委員会を通して案内を広報したが申し込み件数は9件に留まった。しかし、小学生に対する事後アンケートの中には「災害は怖いと思った。」という声や、反対に「災害を経験したことが無いからあまり怖いと思わない。」という素直な感想も見られた。全体を通して「楽しく勉強できた。また参加したい。」という感想が多く見られた。多くの学校行事やイベントが中止になる中で、小学生からこのような声を聴くことができ嬉しく思う。

7 事業実施時の写真



↑心肺蘇生を行っている様子



↑ツナ缶ランタンを制作している様子



↑炊き出しを行っている様子



↑模擬半壊家屋内での活動の様子



↑ワークシートに書き込んでいる様子



↑配布した豪雨対策6点セット



↑ボルダリングを体験している様子



↑全体の集合写真

(3) 看護技術研究会（弘前医療福祉大学）

1 事業名称

日常で使える看護技術を地域の方々に広めよう。

2 事業実施概要

令和3年11月28日（日）10:00～16:00、ヒロロ3階イベントスペースにて「日常で使える看護技術」と題して、イベントを開催した。対象は、弘前市に住むすべての年代の方とし、市内の施設や町内会（計80件）にポスターとチラシを郵送し、集客を行った。イベント当日は新型コロナウイルス感染症が全国的に減少傾向にある時期であったが、感染対策として来場者の連絡先の把握や検温、消毒等の対応を行った。

内容は、体温、血圧、脈拍、 SpO_2 の正常値や正しい測定方法についてスライドやポスターを用いた説明や、血圧・ SpO_2 測定の体験ブースを設けた。スライドによる発表は10:30～、13:00～、15:00～の3回実施し、日常でも実践できるような、体温の測定の仕方、脈拍の測り方などを披露し、来場者の方にも一緒に体験していただいた。

新型コロナウイルスが流行してから、自宅で検温したり、 SpO_2 をはかったり、体調管理をすることが増えたと考えられる。しかし、私たちが大学で学んだ血圧、体温、脈拍、 SpO_2 などの正しい測り方を一般の方が知る機会はないのではないかと考えた。そこで、自分たちが学んだ血圧、体温、呼吸、脈拍、 SpO_2 の正しい測定の仕方を伝えることで、測定して得られた数値がどんなことを意味するのか、自分自身の体の状態について正しく知り、体の異変に気付くことができるようにすることができると考えた。本事業を通して、地域の方々が自身の健康に関心を持ち正しい知識を身に付け、家庭内での看護技術を活用し健康的な生活を送ることができるように支援したいと考えた。

このような活動をすることで、自分自身の身体に関心を持つ人が増え、イベントに参加してくださった方からさらに近所の方、家族などにその知識を伝えることで、地域の方々の健康に

対する意識の向上や健康増進になるのではないかと考えた。

事業を成功させるため、一般の方を対象にすることから、どのようにしたらわかりやすく伝えることができるかを念頭に置き、スライドやポスター制作を行った。来場者アンケートでは、「自宅でも実践できそう」「周りの人にも教えたい」「知らなかったことを知れて良かった」などの意見があり、内容については概ね好評であった。本事業を通じて、地域の方々が自分自身の体に関心を持ち、正しい脈拍、体温の測り方などを知るきっかけになったと考えられた。また「日ごろ若い人と話す機会がないので、このような場があって良かった」という声もあり、新型コロナウイルス感染拡大によって各種イベントや多世代間の交流が減少している中で、貴重な交流の場となった。

3 事業実施報告

ヒロロ3階イベントスペースで「日常で使える看護技術」を開催した。子供からお年寄りの方まで、幅広い年代の方を対象とした。

当日は、お年寄りの方や看護に興味のある方、看護学生、中高生、親子連れなど、計60名の方が参加した。集客目標であった50人を達成することができた。来場者の年代としては、会場が子供の遊び場近くであったことから、お子様連れの方が多かった。また、近くの会場で健康診断も行っていたこともあり、お年寄りの方もいらした。

アンケート結果より、イベントを知ったきっかけは、当日初めて知った人が多かった。たまたま開催していたことを理由に、来た人が半分以上を占めていた。看護学生だから、将来助産師になりたいという中高生も参加していた。

構成員の人数および役割（重複あり）

事業統括者	1名（役割：事業の統括）
事業統括補助者	1名（役割：事業の統括の補助）
広報担当者	1名（役割：チラシの作成及び郵送）
経理管理担当者	1名（役割：経費の管理）
展示ポスター制作担当者	1名（役割：展示ポスター制作）
当日用スライドショー作成	3名（役割：スライドショー作成）
当日スタッフ	15名（役割：血圧測定、発表、受付、誘導、ポスター説明）
アンケート係	2名（役割：アンケートの作成、集計）
成果発表用パワーポイント作成	4名（役割：パワーポイント作成）
成果発表用ポスター作成	4名（役割：ポスター作成）

実施スケジュール

6月上旬	申請書の作成
6月下旬	事業の計画
7月上旬	申請書の修正
10月上旬	チラシ、ポスターの作成
11月上旬	パワーポイントの作成、発表準備
11月28日	イベント開催
12月上旬	アンケートの集計、成果発表会の準備
2月20日	成果発表会

4 補助金による支援の効果

補助金の支援を受けたことによって、私たち看護学生が普段どんなことを学んでいるかを伝え、同時に地域の方々と話し交流する機会を得ることができた。また、チラシやポスターなどによるイベントの周知を行うことで、実際に「チラシを見て来た」という来場者もいた。

イベントを実施したことにより、地域の方々の健康に対する意識が向上したことがアンケートよりわかった。感染対策に必要な除菌シートや手指消毒剤も準備することができ、その後イベント来場者の中に感染者は発生しなかった。

5 反省点・改善点

全体的に事業に取り掛かるのが遅かった。後期授業開始した10月から準備を行い、チラシの郵送はイベント当日の10日前頃であった。

チラシやポスターの制作、業者の方とのやり取り、郵送などに時間がかかった。

宣伝が遅くなったことが、集客人数にも影響を与えたと考えられる。よって、郵送は早めに計画を立て、1カ月前には郵送できるようにする。

会場の予約も、空きがなく本来予定していた場所を借りることができず、予算が大幅に余ってしまったが、オープンなスペースで実施することで結果として当日イベントを知ったという来場者の確保につながった。しかし、思ったより場所が広く、空きスペースを有効に活用した展示内容を考える必要があった。

事業を進める際は、優先順位を考え、会場を借りる場合は、早めに予約する必要がある。

50人で役割分担をして事業を進めたが、仕事をする人としらない人、仕事量に差がでてしまった。役割を決める際は、詳細に役割を決め、一人の人に負担がかかりすぎないようにする。

6 特記事項（自由記載）

なし

7 事業実施時の写真



↑ 発表の様子



↑ 発表時間中の子供の対応（ぬりえの様子）



↑ ポスター展示の様子



↑ ラジオ体操の様子



↑当日スタッフの集合写真

(4) Waku waku club (弘前医療福祉大学)

1 事業名称

「小比内健康いきいきプロジェクト～つなげよう！健康リレー～」

2 事業実施概要

小比内地区の住民が、楽しみ、生きがいを見つけながら、健康への関心や健康づくりへの意欲を向上することを目的として、小比内地区の住民と老人クラブ（32人）を対象に①健康づくり活動（健康体操）②紙媒体を用いた健康に関する情報提供（保健だより）を行った。

健康体操は老人クラブを対象に9月、11月の2回を実施する予定であった。しかし9月に新型コロナウイルスが弘前市内で蔓延したため、老人クラブより健康体操開催は1回目だけと要望があった。そのため健康体操は9月23日に1回のみで開催とし、感染予防のため開催時間と参加人数を縮小して実施した。内容はこちらで準備したタオルを用いた体操を実施した。事前の打合せで「足腰が弱くなっている」「椅子を使用した体操にしてほしい」といった高齢者の方々の要望を取り入れた運動とした。

また、新聞は健康づくりに関する情報提供の機会としてタイトルを「保健だより」とし、小比内地区の全世帯を対象に回覧板で9月・10月・12月の計3回、テーマを設定し発行した。健康体操が1回となったので、2回目分については、学生の写真を使い健康体操の方法や効果についてパンフレットを作成して12月に小比内地区の全世帯へ配布した。

今まで先輩たちが実施してきた地区調査の様子から、小比内地区は個人で運動をしたりするなど健康意識のある高齢者はいるものの、イベントが少なく住民同士の関わりが少ないという声が聴かれていたり、コロナ禍において高齢者の健康状態の低下への心配の声もあったことから、高齢者の心身の健康状態の低下と健康増進ができる場が少ないことを地域課題としてとらえた。そして、自分たちが立ち上げたテーマである～つなげよう！健康リレー～の「つなげよう」の最初のバトンは地区高齢者にあると考え、まずは自身の健康について考える機会がほかの年代と比べて多いと考えられる高齢者を今回対象にし、健康体操を通して地区の健康づくりの発信者になってくれることを期待し健康づくり活動を実施した。

今回は地区高齢者を中心とした、楽しく健康増進ができる場を設け、体操などの活動で交流を促したことで、地域の老人クラブ活動の活性化につながったと考える。更には、実施した健康体操の参加高齢者や保健だよりを読んだ住民達が、知りえた情報や保健だよりから自身の健康を見直すきっかけとなった出来事などをお互いに話題にし、口コミとして家族や近所の人等に伝えていくことで、「健康の環」が高齢者だけでなく、より広く子供から子供の親世代まで年代関わらずに地域へ広がっていくことで地域の活性化につながると考えた。

実施にあたっては、対象が高齢者ということもあり、ヒアリングのコメントを活かして安全面に配慮した場の会場設定を心掛け、普段から地域住民が集まる場所を選定し、当日は椅子を用いた健康体操の方法を検討したり椅子と椅子の間に学生や教員を配置した。

また、目的でもある通り、楽しんで健康づくりを行ってもらうためにまずは住民の代表でもある町会長や老人クラブの会長、会館の責任者と顔合わせをして地域の現状やどんな体操や健康づくりを望んでいるかニーズ等について家に伺い話を聞いた。その上で物品の準備や媒体作成についても学生間で話し合いをした。高齢者に喜んでもらい参加意欲を高めるために、オリジナルのタオル作成や勧誘のチラシも工夫を考え準備した。

事業を通して、大学周辺の住民の方々にとっても、私達看護学生にとっても、両方の成果を感じた。1つは高齢者にとっても若い世代との交流や外出の機会となり健康づくりのきっかけにもなったこと、もう1つは大学生と高齢者が話をしたり一緒に活動を行っていくことで普段お世話になっている地域を知るよい機会にもなったことである。

健康体操に参加した高齢者からのアンケートからも「楽しみながら健康教室に参加できた」「タオル体操のやり方がわかった」「これから自宅でも実施したいと思う」で参加者全員から高評価だった。また、自由記載からは「元気をもらった」「またこのような機会を作ってほしい」という声も聴かれたことから、主催した自分たち学生が、地域の老人クラブ活動の活性化への資源の一つになっていたという発見もあった。また、私達学生も、高齢者の方々の楽しんでいる様子を実際に感じ、夢中で活動することができた。一から自分達で考え企画し、地域の町会長、老人クラブ会長等の人達と実際に交渉し話し合っていくなどの初めての事も多く大変さもあったが、1人では浮かばないアイデアも学生同士で出し合うなどして連帯感を持って達成していく面白さも味わうことができた。

今回、大学と地域住民の交流にもなったことから、今後はこの機会をきっかけに、高齢者だけでなく、幅広い年齢層との交流や多くの学生の活動の機会にもつながっていったらいいと考えた。

3 事業実施報告

①具体的な事業報告・方法を記入

1) 健康体操

○場所：小比内農業研修会館

○対象：小比内老人クラブの会員

参加者 男：4人 女：4人（年代別 70代2名、80代5名、90代1名） 計8名

○時間：10時～11時

○内容：椅子に座って行うタオル体操
（体操内容のパンフレットを配布）

○アンケート結果 回収率：100%

タオル体操の内容

- | | |
|---------|------------|
| ①背伸ばし体操 | ③肘、手首ほぐし運動 |
| ②脇伸ばし体操 | ④腰ひねり運動 |

・タオル体操の必要性、手順・やり方、自宅での継続的实施は、参加者全員から高評価を得た。

・健康教室の進め方は1名の方が「あまりよく分からない」であった。

・「楽しみながら健康教室に参加できた」で参加者全員から高評価だった。自由記載でも、「若人との交流がうれしかった」「元気をもらった」「またこのような機会を作ってほしい」という声があった。

・健康教育の内容について、自由記載欄から、「参加できなかった人にも教えてあげたい」「簡単だったけど、とても効果があった」や「簡単すぎたので、もう少し難しくてもいい」、「食事に関する健康教育もやってほしい」などの意見が聞かれた。

健康体操の目的や開催日などを記載したチラシを作成し、老人クラブ会長を中心に老人クラブの会員（全会員数：32名）へ配布し、コロナウイルス感染症拡大防止のため対象人数を25名までと条件を設けた所、電話連絡で事前に申し込みのあった8名が参加した。会場には、徒歩や自転車で来た人がほとんどであり、2名ほどは車に乗り合わせて来ていたため、地域住民が集まる場を活用したことで効果的だったと思われる。会場は大変広く、隣同士の感覚は1m以上とることができていたり、受付で体温測定を実施したり、窓を開け換気を行い、感染対

策としても良かったと思われる。

健康体操の時間は、20分の体操2回と休憩20分の計1時間の実施予定であったが、コロナ対策のため縮小し、体操を1回とした。しかし、「物足りない」という声があったため体操の一連の流れをもう一度繰り返し実施した。

2) 健康づくり情報を記載した新聞（保健だより）

各号、学生が2名ずつ担当した。高齢者も読みやすいように文字の大きさは大きくし、内容も分かりやすい言葉で表現した。

【9月号のテーマは「歩く」】

歩くことで体によい効果（①糖尿病予防②筋力アップ・血行促進③脳の活性化④高血圧予防⑤骨粗しょう症予防⑥心肺機能アップ）を掲載した。また、自分で行う目標設定の仕方や運動に関する豆知識、運動する際の注意点も掲載した。

【10月号のテーマは「笑う」】

「笑い」が免疫力アップにつながる効果を掲載した。笑うことで脳を刺激し鎮痛効果や幸福感が得られる物質を作り、ストレスの感じ方を軽減することや笑顔の具体的な実践方法を記載した。

【12月号は新聞「保健だより」のまとめ】

お世話になった小比内住民の皆さんへの感謝の言葉を記載した。

3) パンフレット

健康教室での体操は時間を短縮したため、実施できなかった体操をパンフレットに掲載して12月号の新聞とともに毎戸に配布した。内容は「旗揚げ体操」と「コグニサイズ」について脳を活性化する体操として紹介した。これも健康体操時に配布したパンフレットと同様、学生が見本となった写真を用いて方法やポイントを説明した。

②構成員の具体的な人数や役割

事業統括者（2名）：全体的な計画の修正や役割配分、担当教員との打ち合わせ、町会長や老人クラブとの連絡調整

事業統括補助者（1名）：統括者の補助

健康教育担当者（4名）：健康体操の計画・実施

チラシ担当者（2名）：健康体操のチラシ作成

保健だより作成（6名）＋3年生お手伝い：9月、10月、12月号の3回発行
（各2名ずつ）

経費管理担当者（1名）：予算の管理

③実施スケジュール

8月上旬	健康に関する情報を掲載した保健だより（9月号）、健康づくり活動（健康体操）告知用チラシの作成
9月上旬	保健だより（9月号）・告知用チラシの配布
9月23日	健康体操実施①
10月上旬	保健だより（10月号）配布 健康体操①の様子を掲載した保健だより・健康体操②のパンフレット作成
12月上旬	老人クラブ：健康体操①の様子を掲載した保健だより、健康体操②のパンフレット配布 毎戸：保健だより（最終号）と健康体操②のパンフレット配布

4 補助金による支援の効果

今回、補助金の支援を受けたことによって、地域に出て住民の皆さんと触れ合う機会になり、オリジナルでタオルを作成できたことで参加者の記憶に残り、自分の健康づくりを意識してもらえる機会を設けることができたと思う。また、健康体操実施時にマスクや消毒液等を配布できたことで、改めて感染予防を促すこともできた。

参加後のアンケートからも「また開催して欲しい」という声が聞かれ、学生地域活動支援事業を通して、小比内地区住民の皆さん一人一人の健康づくりや老人クラブの活性化等への地域への還元ができたと考える。

5 反省点・改善点

健康体操の内容では、高齢者の特徴をとらえた運動として椅子に座って行える運動を実施したが、参加者より「簡単であった」という声もあったことや、実際に住民の方と会った時に、元気な高齢者も多かったことから徐々に難易度の高いものや低いものを組み合わせた体操を取り入れる等、企画する段階から住民さん方と相談しながら一緒に考える等の工夫が必要だったと考える。

新聞（保健だより）は、健康教育を縮小した分、発行を増やした。しかし、健康情報の内容が一般的なものになってしまった。地域特性を踏まえた保健だよりにするためには、小比内地区のウォーキングコースの紹介や、学生が実際に健康的な生活を送って変化した部分など学生の考察や思い体験談を加えると、より住民に身近な保健だよりになったのではと考える。また、小比内地区の保健だよりとして、妊婦や障がい者向けにも考慮した内容の新聞になるようにも考えたらより良いものになったと考える。

評価の仕方として、健康体操に関しては、実施後のアンケートから参加者の反応を知ることができたが、保健だよりに関しては、住民の反応や効果がどのようなものだったか分からなかった。そのため、体操実施時に発行した保健だよりの感想を聞く等、住民さんの声を聞き次回に繋げられるように工夫が必要だと考える。

6 特記事項（自由記載）

コロナ感染症拡大に伴い、2回実施する予定であった健康体操を1回に減らした。実施できなかった分の代替案としてパンフレットを作成し、小比内地区全世帯へ配布した。

今回は小比内地区に限定したが、小比内地区だけではなく他の地域にも健康を広めるためにも、後輩である3年生に物品準備や保健だより作成に協力してもらった。

7 事業実施時の写真



↑ 担当教員との打ち合わせ



↑町会長に初めてあいさつに行った際



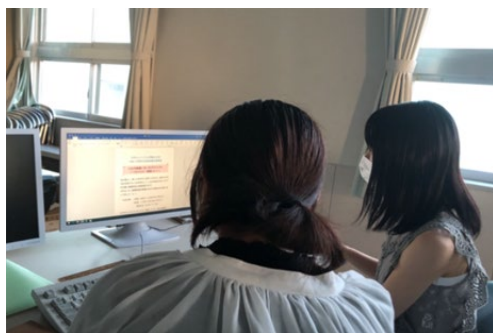
↑町会長、老人クラブ会長、農村会館管理人との顔合わせ



↑老人クラブ会長と会場の下見



↑町会の掲示板で新聞掲示



↑新聞づくりに励む学生



↑ 学生同士のリハーサル



↑ 健康体操実施前に住民さんと話している場面



↑ あいさつ・自己紹介の場面



↑ 体操実施前のパンフレットを用いた説明



↑ 腰ひねり運動



↑ 集合写真



↑ 後輩の3年生を含めた打ち合わせ

3. 成果発表会【中止】

事業の終了報告として、各学生団体が実施した事業の成果等を広く知ってもらうため、成果発表会の開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の急拡大により中止とし、書面による審査を行った。

(1) 概要

日 時：令和4年2月20日（日）13時00分～16時00分

撮影会場：土手町コミュニティパーク 多目的ホール

配信方法：アップルストリーム（LIVE 配信&事後配信）

対 象：一般市民、学生、大学・行政関係者等

主 催：大学コンソーシアム学都ひろさき

共 催：弘前市

(2) 審査

今年度採択された学生団体の事業内容を審査し、点数が高い学生団体の順に「最優秀賞」及び「優秀賞」を表彰する。審査は以下の5項目で、0点～3点の4段階で採点する。

＝審査項目＝

- ① 学生だからこそ実施できた独自のアイデアで溢れる事業か。
- ② 地域課題の解決や地域の活性化に繋がる活動であったか。
(地域や市民への貢献性の高い事業であったか。)
- ③ 費用と効果、成果のバランスが取れているか。(費用対効果の高い事業であったか。)
- ④ 地域貢献に対する検証がされているか。
- ⑤ 与えられた時間を有効に使い、事業概要や事業成果をわかりやすく発表ができているか。

審査結果

【最優秀賞】弘前医療福祉大学救急救命研究会

4. 事業成果

今年度は、前年度からの継続団体が2団体及び新規団体が2団体の計4団体が同事業に申請した。それぞれイベントの実施や調査活動等、各団体の特徴を活かした学生ならではのオリジナリティ溢れる活動を弘前市内各所で行った。これにより、学生と地域の人との交流が新たに生まれ、活動を通して、自分達が生活する弘前市の新たな魅力や団体の今後の目標や課題の発見につながったと考える。

5. 次年度以降の実施に向けた改善点

地域に出て活動をする学生に積極的に同事業を活用して欲しいが、ここ数年、申請件数が少ないため、申請件数の増加を目指し事業の周知に力を入れていきたい。また、学生団体の活動をより多くの人に周知するために、特に高校に対しての情報発信を強化していきたい。

【参考】同事業の要項

(1) 応募できる団体

学生で構成される団体(ゼミ、研究室、課外活動団体等)で、次の要件の全てに該当するもの。
なお、既存の団体のほか、新たに組織する団体も対象とする。

- ・学生の活動を教員が実質的に指導していること。(名義のみの顧問は不可とする。)
- ・構成員が概ね5人以上であること。
- ・コンソーシアム構成大学の学生で組織された団体であること。

(2) 対象事業

弘前市の地域活性化や地域課題の解決を目的に実施する事業で、次に掲げる要件の全てを満たしているもの。

- ・弘前市内で実施される事業であること。
- ・弘前市民を対象にした事業であること。
- ・令和3年12月31日で完了する事業であること。

(3) 補助金額と補助対象経費

① 補助金額

- ・単一の団体が事業を行う場合：上限100,000円
- ・異なる大学の団体が連携して事業を行う場合：上限200,000円

② 補助対象経費

事業を実施するために直接必要な経費とする。

(講師等謝礼、旅費、消耗品費、原材料費、燃料費、印刷製本費、通信運搬費、保険料、会場等使用料、賃借料及びその他本コンソーシアム会長が適当と認めたもの)

(4) 事業審査及び審査基準

応募書類及び申請団体へのヒアリング等を実施し、次の10項目について審査し、決定する。

- | | | | | |
|------|------|--------|------|------|
| ○的確性 | ○効果性 | ○適切性 | ○自主性 | ○実現性 |
| ○公益性 | ○地域性 | ○費用妥当性 | ○将来性 | ○独創性 |

令和 3 年度活動報告

Ⅱ．連携推進事業

5 大学合同シンポジウム【次年度へ延期】

1. 趣旨

来場者が興味を持ちやすいテーマを設定し、市民向けの公開シンポジウムを開催する。また、会場内でコンソーシアムのパネル展示等も併せて行い、コンソーシアムをより多くの人に知っていただけるようPR活動をする。

2. 概要

○テーマ

「宇宙でわたし達のからだはどうなるのでしょうか」

○内容

最近、一般の人たちが短期間の宇宙旅行を経験し、メディアを賑わしています。莫大なお金を支払って宇宙空間、すなわち微小無重力（マイクロG）を体験し地上約400kmから地球を見下ろし楽しんでいます。

地球上（1-G）と環境が全く異なる宇宙では、わたし達のからだの形態や機能にどのような変化があるのでしょうか。またこのような環境をうまく利用してからだの健康づくりのための研究が進められています。

○日時

令和4年1月29日（土）13時30分～15時00分

○聴講方法

- ・公開視聴会場（土手町コミュニティパーク）
- ・オンライン配信（アップルストリーム）

○基調講演講師

吉岡 利忠 氏（前弘前学院大学長）

○共催

弘前市

3. 事業成果

本年度も、昨年度と同様に新型コロナウイルス感染症対策のため入場制限を設け、公開視聴会場及びオンライン配信（アップルストリーム）との同時配信を計画していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて中止となった。なお、本企画内容は次年度に持ち越して開催することを予定している。



**大学コンソーシアム学都ひろさき
5大学合同シンポジウム**

**宇宙で
わたしたちのからだは
どうなるのでしょうか**

最近、一般の人たちが短期間の宇宙旅行を経験し、メディアを賑わしています。莫大なお金を支払って宇宙空間、すなわち微小重力（マイクロ-G）を体験し地上約400kmから地球を見下ろし楽しんでいます。

地球上（1-G）と環境が全く異なる宇宙では、わたしたちのからだの形態や機能にどのような変化があるのでしょうか。またこのような環境をうまく利用してからだの健康づくりのための研究が進められています。

**令和4年1月29日(土)
13:30～15:00頃**
対象：学生、市民、大学関係者、行政関係者等

基調講演講師
前弘前学院大学学長
吉岡 利忠

定員
①公開視聴会場の定員…20名
②アップルストリーム（オンライン配信）…無制限
②は事後視聴も可能です。

視聴方法
①土手町コミュニティパーク（公開視聴会場）
②アップルストリーム（オンライン配信）※申込不要
URL: <http://applestream.jp/>

プログラム
13時30分…開会挨拶
13時35分～14時55分…基調講演（質疑応答含む）
14時55分…閉会挨拶
講演テーマ：
「宇宙でわたしたちのからだはどうなるのでしょうか」

申込
参加方法 会場での視聴は事前予約制（先着順）
※公開視聴は青森県内在住者が対象です
申込方法 会場での視聴を希望する方は以下へお申込ください
TEL:0172-39-3160
E-Mail: conso@hirosaki-u.ac.jp
必須記載事項 氏名・住所・電話番号・メールアドレス
参加費 無料

事前質問受付
本シンポジウムのテーマに関する質問を事前に受け付け、当日に基調講演講師から回答します。
また、質問は以下へ受け付けます。
FAX:0172-39-3919
E-Mail: conso@hirosaki-u.ac.jp
事前質問締切：令和4年1月21日（金）まで

主催：大学コンソーシアム学都ひろさき（弘前大学、弘前学院大学、柴田学園大学、弘前医療福祉大学、放送大学青森学習センター） 共催：弘前市
弘前市「令和3年度大学コンソーシアム学都ひろさき活性化支援事業費補助金」対象事業

各大学公開講座等助成事業

1. 各大学公開講座等助成事業とは

本コンソーシアムを構成する弘前市内5大学が行う公開講座等事業（以下「事業」）の実施を補助することにより、各大学の特色を活かしながら蓄積する知を広く市民に向けて発信・還元することで、高等教育機関が集結する「学都ひろさき」を強く印象づけるとともに、市民が本コンソーシアム及び大学を身近な存在であると感じ、市民による大学の活用を促すことを目的とする。

2. 補助を行った事業

(1) 放送大学青森学習センター

事業名称	放送大学青森学習センター公開講演会「地域のリーダーに学ぶ講演会」
主催	放送大学青森学習センター
内容	広く学生や地域住民を対象に地域で活躍するリーダーを講師に迎え、講師のこれまでの実績や経験から、地方に住みながら夢をつかむ実行力や若者の夢を支援するための人づくりについて学び考える機会と併せ、放送大学及び青森学習センターについても知ってもらう機会とした。 今年度は、弘前を中心に40年にわたって活動を続けているパーカッション・グループ（ファルサ）代表の肥田野恵里氏を講師に、「弘前と世界をつなぐ音楽の”絆” ～マリンバと打楽器アンサンブルに魅せられて～」と題してこれまでの活動を振り返りながら音楽の素晴らしさを語っていただくと共に、実際の演奏を披露していただいた。
日時	令和3年11月14日（日）13:00～15:00
会場	弘前大学創立50周年記念会館 みちのくホール



講演会チラシ

実施状況等	○参加者数：113名  講演会の様子
--------------	--

(2) 弘前医療福祉大学短期大学部

事業名称	弘前医療福祉大学短期大学部「青森県産食材を使った料理作品展」
主催	弘前医療福祉大学短期大学部 別科 調理師養成1年課程
内容	学習成果発表の場として毎年、青森県産食材を使用した日本・西洋・中国料理のコースメニューを考案・製作して展示・公開し、調理実習担当講師による表彰のほかに、一般来場者による投票を実施した。 また、津軽を代表する郷土料理として昔から親しまれてきた「粥の汁」を、若い世代の視点から工夫した「アレンジ粥の汁」として試食を提供した。 さらに、県産食材を使用した料理を紹介することにより、県産食材の消費拡大につながることを願うとともに、「食」にかかわる様々な話題や情報を発信した。  令和4年 11:30~15:00 2月26日(土) 弘前市土手町コミュニケーションプラザ1階 多目的ホール(弘前市土手町31) ※専門家審査し各賞を選考します※ 新型コロナウイルス感染症対策への協力をお願いいたします ※感染症拡大防止によってはお内容の一部変更や中止する場合がございます。 事前にホームページで最新の状況にご留意ください。 弘前医療福祉大学短期大学部 別科 調理師養成・1年課程 弘前市小出内3丁目18-1 TEL:0172-27-1001 https://www.hirosakiu.ac.jp/ Instagram 登録してね★ #hiroakikuwa 令和3年度大学コンソーシアム青森ひろさき活性化支援事業協賛金助成事業 事業チラシ

日時	令和4年2月26日（土）11時30分～15時00分
会場	土手町コミュニケーションプラザ1階
実施状況等	新型コロナウイルス（オミクロン株）の急激な感染拡大による弘前市への「まん延防止等重点措置」の適用に伴い、中止とした。

（3） 柴田学園大学短期大学部

事業名称	特別公開講座「岩木山の恵みを楽しもう！～もっと知りたい山の世界～」
主催	柴田学園大学短期大学部 地域文化センター
内容	弘前を中心とした津軽地域の特色を知り、そこから地域の問題について学ぶ本学独自の科目を、弘前市百沢のメープルハウス山村オーナーの相馬芳廣さんを講師に迎え、一般や中・高校・大学生向けに開講した。 また、津軽を象徴する山であり、津軽富士と呼ばれる岩木山周辺の自然やその地域での暮らしについて紹介し、地元弘前の知られざる魅力等も講演いただいた。 講演会チラシ
日時	令和3年11月6日（土）10時00分～12時00分
会場	柴田学園大学短期大学部50講義室

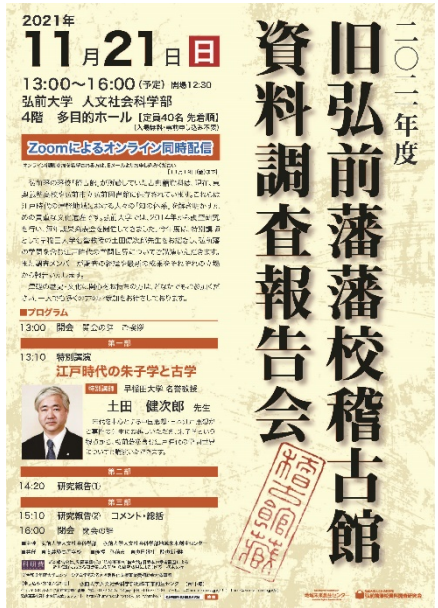
実施状況等	○参加者数：57名（一般18名、学生39名）  特別公開講座の様子
-------	---

（４） 柴田学園大学

事業名称	絵本のごちそうクッキングー親子時間を楽しもうー
主催	柴田学園大学 地域活用センター
内容	「よんで つくって たべて たのしむ」をねらいとした、親子対象の体験的活動を行った。 子どもの創造力や自立心を高めるため、絵本の世界を楽しみながら、絵本「きょうのおやつは」、「おかしになりたいピーマン」等の読み聞かせを行った後、実際にその絵本に出てきたおやつ【マドレーヌ、カップケーキ】を調理した。  事業チラシ
日時	令和3年11月13日（土）10時00分～12時00分

会場	弘前市学習センター（東部公民館）
実施状況等	○参加者数：31名（こども9名、保護者7名、学生13名、教員2名）  事業の様子

（５） 弘前大学

事業名称	公開講座「2021年度旧弘前藩藩校稽古館資料調査報告会」の開催
主催	弘前大学人文社会科学部・弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター
内容	弘前藩の藩校「稽古館」が所蔵していた古典籍資料は、江戸時代の津軽地域における人々の「知の体系」を解き明かすための貴重な文化遺産である。 弘前大学では、2014年から調査研究の成果発表会を開催しており、今年度は特別講師として早稲田大学名誉教授の土田健次郎先生をお招きし、弘前藩の学問を含む江戸時代の学問世界についてご講演いただいた。 また、調査メンバーが調査の経緯や最新の成果を報告した。  講演会チラシ

日時	令和3年11月21日（日）13時00分～16時00分
	弘前大学人文社会科学部4階多目的ホール
実施状況等	○来場者数：38名  講演会の様子

3. 補助事業実施による成果

本コンソーシアム構成機関が、各大学の特色を活かしたテーマを設定し、感染対策を講じながら公開講座を開催し、各大学が持つ知的シーズを提供した。これにより、高等教育機関が有する学術機能を地域社会に還元し、弘前市における教育・文化等の向上に寄与し、地域振興に貢献した。加えて、市民に「学都ひろさき」を印象づけ、市民による大学の活用を促すことが出来た。

【参考】同事業の要項

（1）補助対象事業

次に掲げる条件のいずれかを満たす事業を補助対象事業とする。なお、学園祭で市民向けの公開講座として開催する事業は、補助対象外とする。

- ① 広く一般市民を対象とするもの
- ② より市民の目に触れ、より市民が参加しやすい形態で行われるもの（街なかの施設等、大学外の会場で行うなど）

（2）補助金の交付額と補助対象経費

- ① 補助金の額は、原則、1大学あたり上限50,000円とする。
- ② 補助対象経費は、事業を実施するために必要な以下の経費とする。
 - ・会場借上費
 - ・チラシ・ポスター等印刷費（制作費）
 - ・チラシ・ポスター等発送費
 - ・事業実施に係る消耗品費
 - ・外部講師謝金
 - ・各号に掲げるもののほか、本コンソーシアム会長が必要と認めたもの

新型コロナウイルスワクチン一括接種

1. 内容

大学コンソーシアム学都ひろさき（弘前大学、弘前学院大学、柴田学園大学、弘前医療福祉大学、放送大学青森学習センター）では、構成大学のうち弘前学院大学・柴田学園大学・弘前医療福祉大学の学生・教職員を対象とした新型コロナウイルスワクチン一括接種（1回目・2回目）を7月11日（日）から開始し、8月11日（水）に希望者への接種が完了した。なお、弘前大学、放送大学青森学習センターの教職員については弘前大学一括接種（6月27日（日）～8月7日（土））にて実施した。

そして、新型コロナウイルスワクチン一括接種（3回目）を3月13日（日）、3月20日（日）及び3月21日（月・祝）の3日間で実施した。なお、弘前大学、放送大学青森学習センターの教職員については弘前大学一括接種（3月5日（土）～3月19日（土）※土日限定）にて実施した。

実施にあたって、各大学から医師や看護師、スタッフなどを派遣していただき、大学コンソーシアム学都ひろさきの構成大学が一丸となって一括接種を行った。

○対 象 各大学の学生・教職員（約1,570人）
 〈内訳〉弘前学院大学 （約550人）
 柴田学園大学 （約450人）
 弘前医療福祉大学 （約570人）

○接種時期

1回目	7/11	柴田学園大学、弘前医療福祉大学
	7/12、13	弘前学院大学
	7/14	柴田学園大学
2回目	8/8	柴田学園大学、弘前医療福祉大学
	8/9、10	弘前学院大学
	8/11	柴田学園大学
3回目	3/13	弘前医療福祉大学
	3/20	弘前学院大学、柴田学園大学
	3/21	弘前医療福祉大学

○1回目接種 1,562人
 〈内訳〉弘前学院大学 546人
 柴田学園大学 446人
 弘前医療福祉大学 570人

○2回目接種	1, 5 5 5人
〈内訳〉弘前学院大学	5 4 3人
柴田学園大学	4 4 4人
弘前医療福祉大学	5 6 8人

○3回目接種	1, 3 2 6人
〈内訳〉弘前学院大学	4 4 3人
柴田学園大学	3 7 7人
弘前医療福祉大学	5 0 6人

○3回目新入生等	1 2 5人
〈内訳〉弘前学院大学	3 9人
柴田学園大学	1 8人
弘前医療福祉大学	6 8人

- 従事者
- 医 師：弘前大学
- 看 護 師：弘前大学・弘前学院大学・弘前医療福祉大学
- スタッフ：弘前大学・弘前学院大学・柴田学園大学・弘前医療福祉大学



接種の様子

2. 新聞記事

弘前3大学も千両人対象

弘前大学で11日、同大以外、弘前市内3大学の教職、職員や学生を対象とした新型コロナウイルスワクチンの接種が始まった。対象者は、学院大、柴田学園大、弘前医療福祉大の計約700人。1回目の接種は14日まで続く。

弘大が国に申請した接種区域の一環で、対象は弘前市内の大学教職、職員や学生を対象とした新型コロナウイルスワクチンの接種が始まった。対象者は、学院大、柴田学園大、弘前医療福祉大の計約700人。1回目の接種は14日まで続く。

弘大でワクチン接種を受ける弘前医療福祉大の学生(11日)

東奥日報社提供
令和3年7月13日(火) 29面

700人1回目接種

弘大で地域開始

弘前市立弘前高等学校、弘前学院大学、弘前医療福祉大学の学生・教職員を対象とした新型コロナウイルスワクチンの接種が始まった。弘大が国に申請した接種区域の一環で、対象は弘前市内の大学教職、職員や学生を対象とした新型コロナウイルスワクチンの接種が始まった。対象者は、学院大、柴田学園大、弘前医療福祉大の計約700人。1回目の接種は14日まで続く。

弘大でワクチン接種を受ける弘前医療福祉大の学生(11日)

陸奥新報社提供
令和3年7月13日(火) 2面

3. 事業成果

1回目及び2回目接種は、自治体へのワクチン供給の見通しがつかない時期であったものの、他大学の学生・教職員に対して、2021年8月までに2回目の接種を完了し、地域の感染拡大防止及び自治体の接種に係る負担軽減に大きく貢献した。本取組は、職域接種のモデルケースとして全国的にも紹介されることになった。

また、ワクチンを2回接種したとしても、新型コロナウイルスに感染する可能性があることから、ワクチン接種後も感染対策を継続していく必要がある。一方、ワクチン接種を完了したことで、弘前市内の大学生が安心して大学生活や日常生活を過ごし、地域における感染予防等の貢献につながると期待している。

「大学発 地域振興券」

1. 内容

大学コンソーシアム学都ひろさきの加盟大学（柴田学園大学、弘前学院大学、弘前医療福祉大学）と弘前大学が協力し、弘前市内の大学生への経済的支援と地元弘前市の経済活動の活性化に貢献することを目的として「大学発 地域振興券」を発行した。

2. 地域振興券について

- 構成：5,000円分（額面500円券×10枚綴）
- 利用期間：令和3年10月1日（金）～令和4年1月31日（月）
- 販売価格：2,000円（5,000円の振興券を2,000円で販売）
- 総発行数：4,811部

《一次発行》

- 販売部数：弘前大学 3,140部
- 弘前学院大学 340部
- 柴田学園大学 220部
- 弘前医療福祉大学 300部
- 計 4,000部

○応募期間：令和3年9月

○販売期間：令和3年10月

《二次発行》

- 販売部数：弘前大学 636部
- 弘前学院大学 68部
- 柴田学園大学 46部
- 弘前医療福祉大学 61部
- 計 811部

○応募期間：令和3年11月

○販売期間：令和3年11月

3. 弘前市内の参加店舗（一部抜粋）

《スーパー》	《ドラッグストア》	《弁当》
スーパーさとちょう	スーパードラッグアサヒ	じょいふる
カブセンター	メガ（MEGA）	から揚げ専門店 こばしょぐ
ベニーマート	ハッピー・ドラッグ	かみどてキッチンカープロジェクト
中三	ケードラッグ101	ヤオハチスパイス
生活協同組合コープあおもり	菊池薬局	ペッパーランチ弘前ヒロロ店
フレッシュファームFORET		麵'S酒場 燦々
いとく		お食事処あお菜

《菓子》	《理美容》	《その他》
パティスリーヴェルジェ	ロイヤルオーダー	まわりみち文庫
津軽藩ねぶた村 売店	髪工房タカ	ビノビジョン
甘栄堂	美容室プランタン	T S U T A Y A
御菓子司 双味庵	H a i r S t u d i o N E O	農家のゆうき
ジャルダン	f a b	ローソン弘前大学病院店
	美容室アンダーカラーズ	成田専蔵珈琲店
	BAMBOO	オザキ・フローリスト

4. 新聞記事

弘前の大学生と街を支援

4 全金は弘前大栄市学生連大、弘前県学生連、弘前県福祉協会、計8,000人余の学生が販売対象となる。弘は10月11日、他うの金は10月1日に発売する。

弘前市内では昨年、弘が学生を対象に2千円で5千円の食事ができる「フレッシュお食事」を、

弘前市内の大学でつる。大学、コンソーシアム等都ひのさきは10月、4大学の学生・短大を販売に「コンサー、地域振興券」を販売する。学生は5千のの支払いで、食品品などの生活必需品5千円の買ひ物がさる。発行部数は1万5千冊。

新形コンソーシアムは福さむむと、地域経済の支援が狙い、全国のコンソーシアム（連携組織）で初の試みという。3大学の差額は、弘が弘前市が負担するが、クラウドファンディングで得た資金も充て

予定、5,000冊券枚枚つりて、事務を、発行に支續がある。コンソーシアム事務局長は川内一平まで、若一ヶ月まで使用できる。

コンソーシアムは、振興券を活用する店として、市内の生活雑貨店、スパ、并店売売、理容店店を約100店舗を想定してい。店內飲食は、利用できない。

参和店店舗9月6日、30日に「フレッシュアップ」電話0747-280778に申し込込

弘前市内で昨昨年、弘が学生を対象に2千円で5千円の食事ができる「フレッシュお食事」を、

弘前市内の大学でつる。大学、コンソーシアム等都ひのさきは10月、4大学の学生・短大を販売に「コンサー、地域振興券」を販売する。学生は5千のの支払いで、食品品などの生活必需品5千円の買ひ物がさる。発行部数は1万5千冊。

新形コンソーシアムは福さむむと、地域経済の支援が狙い、全国のコンソーシアム（連携組織）で初の試みという。3大学の差額は、弘が弘前市が負担するが、クラウドファンディングで得た資金も充て

2千円で5千円分振興券

4 大学連携組織、10月から販売

予定、5,000冊券枚枚つりて、事務を、発行に支續がある。コンソーシアム事務局長は川内一平まで、若一ヶ月まで使用できる。

コンソーシアムは、振興券を活用する店として、市内の生活雑貨店、スパ、并店売売、理容店店を約100店舗を想定してい。店内飲食は、利用できない。

参和店店舗9月6日、30日に「フレッシュアップ」電話0747-280778に申し込込

弘前市内で昨昨年、弘が学生を対象に2千円で5千円の食事ができる「フレッシュお食事」を、

弘前市内の大学でつる。大学、コンソーシアム等都ひのさきは10月、4大学の学生・短大を販売に「コンサー、地域振興券」を販売する。学生は5千のの支払いで、食品品などの生活必需品5千円の買ひ物がさる。発行部数は1万5千冊。

新形コンソーシアムは福さむむと、地域経済の支援が狙い、全国のコンソーシアム（連携組織）で初の試みという。3大学の差額は、弘が弘前市が負担するが、クラウドファンディングで得た資金も充て

（福土知久）

東奥日報社提供
令和3年8月31日（火）24面

[illegible]

陸奥新報社提供
令和3年8月31日（火）3面

5. 紅屋商事株式会社による寄附金



陸奥新報社提供
令和3年1月30日（火）2面

6. 事業成果

本事業は、クラウドファンディングや地元企業からの寄附金等を活用し、地域全体の連携で実施した学生支援事業となった。「大学発 地域振興券」を活用した学生からは「コロナ禍でアルバイトがなかなかできない中、地域振興券のおかげで生活にゆとりが出来ました」、「地域振興券のおかげで金銭的にも余裕ができたし、精神的にも支えてくださった方々がいるという気持ちになりました」、「外食を我慢していましたが、友人と地域のお店でご飯食べて思い出を作ったり、栄養のあるご飯を食べることができました！」等、感謝の声が多数届いた。

令和 3 年度活動報告

Ⅲ. 学生交流事業

学生団体シンポジウム【中止】

1. 趣旨

近年、地域に関心を持ち、地域活性化や地域貢献、PBL（Problem Based Learning：問題解決型学習法）として、ゼミや研究室、課外活動で、地域に出て活動をする学生が増え、それぞれに一定の成果をあげている。

しかし、団体同士の繋がりは薄く、連携がとれないことや特定の地域のみでの活動、学生の地域に根ざした活動を知らない市民が多いことが課題である。

そこで、学生の活動を広く公開することで、学生が弘前市を盛り上げている現状を多くの市民が知ることのほか、大学の枠を越えた学生同士の交流の場をつくり、団体同士の繋がりを強化、さらなる活発な活動を目指す。

2. 概要

学生団体シンポジウム～5大学と学生1万人が弘前をつくる～

○日 時：令和4年2月20日（日）13時00分～16時00分

○撮影会場：土手町コミュニティパーク 多目的ホール

○配信方法：アップルストリーム（LIVE配信＆事後配信）

○対 象：一般市民、学生、大学・行政関係者等

○共 催：弘前市

3. 参加学生団体

1 弘大親子組 (弘前大学)  成果発表！ 地域のお祭りに不可欠な親子の方の高齢化や不足により廃れていくことが地域課題と考え、若者に興味・関心を持ってもらうきっかけにするために行った活動成果を発表します。	2 学生団体CoCo-Cam (弘前大学)  活動発表！ 「地域と○○の架け橋となる」私達の活動は、医Café SUP?から始まりました。地域と病院の架け橋が、暖かくてゆったりとしたカフェ。医療をカジュアルにする試みは、多くの方に注目していただきました。医カフェによって見えてきた社会課題は、どれも医療の視点からだけでは解決できない。多種多様な人が、包括的に社会をみつめ、問題提起をすること。これこそが新たな地域社会連携、まちづくりを考える上で大切だと考えております。	3 Waku waku club (弘前医療福祉大学)  成果発表！ 小比内地区はイベントが少なく、住民同士の関わりが少ないことや、高齢者の健康状態の低下を心配する声を基に、楽しく健康づくりへの意欲を向上することを目的に実施した事業の成果を発表します。
--	--	--

4 看護技術研究会
(弘前医療福祉大学)



成果発表!

地域の方々が、自身の健康に関心を持ち、正しい知識を身につけ、家庭内で看護技術を活用し健康的な生活を送れるよう、看護の視点から生活に役立つ情報や技術を周知することを目的に実施した事業の成果を発表します。

5 弘前医療福祉大学 救急救命研究会
(弘前医療福祉大学)



弘前医療福祉大学
Hiroaki University of Health and Welfare

災害大国と呼ばれる我が国では、常に災害に対する意識を持つことが重要であり、災害時に想定される様々な事象に対応できるよう、学童期から継続的に実践に即した防災訓練を実施し、防災教育の一助となることを目的とした事業の成果を発表します。

6 弘前大学忍者部
(弘前大学)



弘前大学忍者部は、全国で3番目に創設した忍者部です。日本で唯一現存する甲賀流忍術居敷を拠点として、忍者修行をしています。11月13日には、弘前市1%システムのスタート部門で忍交流事業として市民交流を実施しました。

7 食育研究グループ
(紫田学園大学短期大学部)



活動発表!

栄養士課程の講義科目「子供の栄養」の一環で「りんごができるまで」をテーマに、弘前市内の保育園での食育活動、食育フェスティバルでのポスター展示を行いました。活動を通して発想した課題や成果を発表します。

8 学生団体@ぼくらしnext
(弘前大学)



活動発表!

Instagram ツイッター フェイスブック

「学生が一歩踏み出す機会の創出」を理念に活動しています！
私たちは、学生の挑戦・気づき・成長の輪を作っています！
今年度は「スタディカフェぼんよう」の運営や「学生シンポジウム」の開催など、私たち自身も新しい事業に挑戦してきました！

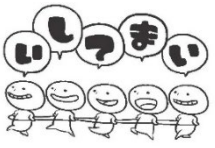
9 BeeComeプロジェクト
(弘前大学)



Instagram ツイッター ホームページ

BeeComeプロジェクトは、学生の「やりたい」にことごとく向き合うプロジェクトです！企画・デザイン・映像制作・ITなどのクリエイティブスキルに特化した講座と実践的なプロジェクト運営（地域交流イベントの実施）によって、実用的なスキルを身につけます。ここでは「自分のできることやできないことの気づき」「新たな考えの発見」「同じ目標を掲ぐ仲間との出会い」など多くの学びと共に次の行動のきっかけを創ります！

10 学生委員会いしてまい
(大学コンソーシアム学都ひろさき)



活動発表!

市内の大学生が「弘前のために何ができるのか」を考え、多様な企画を行っている学生委員会です。今年度は「衣類回収BOXの設置・回収」「学生のために頑張っている飲食店の取材・紹介」を行っています。大学教職員や弘前市役所職員のバックアップのもと、地域の自立と発展を図ることを目的としています。「弘前市のことを知りたいたい」「地域に関わった活動してみたい！」思いを持った学生たちが、日々楽しく活動しています。

4. 事業成果

本年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため入場制限を設け、会場及びオンライン配信（アップルストリーム）を計画していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて中止となった。

令和3年度学生団体シンポジウム
5大学と学生1万人が
弘前
をつくる

アップルストリームにてLIVE配信!

学生団体シンポジウムとは…

近年、地域に関心を持ち、地域活性化や地域貢献、PBL(Problem Based Learning: 問題解決型学習法)として、ゼミや研究、課外活動で、地域に出て活動をする学生の活動を広く公開し、学生が弘前市を盛り上げている現状を多くの市民に知ってもらうだけでなく、大学の枠を超えた学生同士の交流の場をつくり、団体同士の繋がりが強化、さらなる活発な活動を目指し開催いたします。

日時 令和4年 **2月20日(日) 13:00～16:00**

配信 LIVE配信はこちらから視聴できます。
<https://applestream.jp/>

※当日アーカイブ配信もあります。

土手町コミュニティパーク 多目的ホール 〒036-8182 青森県弘前市土手町31番地

主催: 大学コンソーシアム学都ひろさき
(弘前大学、弘前学院大学、紫田学園大学、弘前医療福祉大学、放送大学青森学習センター)

共催: 弘前市

問い合わせ先: 大学コンソーシアム学都ひろさき事務局 (〒030-8560 青森県弘前市文京町1番地 弘前大学事務局3階3和洋会談室) E-mail: conso@hiroaki-u.ac.jp HP: <http://www.conso.kumhrosaki.jp/> TEL: 0172-39-3160 FAX: 0172-39-3919

ひろさき移動キャンパス

1. ひろさき移動キャンパスとは

本コンソーシアムを構成する5大学が共同で「学都ひろさき」の魅力を県外にアピールすることにより、弘前で学びたいという学生の増加を目指し、また、他地域コンソーシアムとの交流を深め、本コンソーシアムの充実を図ることを目的として、北海道函館市の「キャンパス・コンソーシアム函館」が主催する「HAKODATEアカデミックリンク」に、本コンソーシアム構成機関の所属する学生団体がブース出展をする。

2. 概要

○日時

令和3年11月26日（金）～12月19日（日）

○開催方法

アカデミックリンク2021特設ページによるオンライン開催

○参加団体

- ①弘前大学いしてまい
- ②弘前大学ひろエネ

3. 発表内容

○参加形態

ブース出展

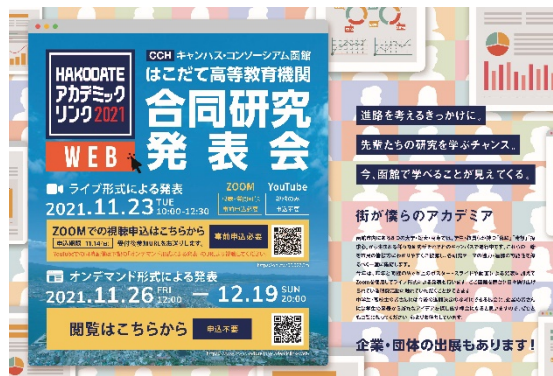
○発表内容

①弘前大学いしてまい

弘前市の平成29年度の1人1日あたりのごみ排出量は、都道府県別で全国ワースト5位、県内ではワースト3位である。また、リサイクル率は全国ワースト7位、県内ワースト7位と、弘前市の喫緊の課題である。多くのごみを捨てることは、環境の負荷や費用の負担にもつながり、ごみの排出量を抑えることで、環境への負荷や費用の負担を抑えることができる。そこで、私たちいしてまいは、この課題を解決したいと考え検討を重ねた結果、ごみ排出量の減量とリサイクルが両立できる「衣類回収ボックス」を弘前学院大学及び弘前大学構内に設置し、ごみ問題への意識啓発に取り組みたいと考えた。衣類回収ボックスで回収された衣類は、再資源化業者により再利用できるものと、それ以外に選別され、再利用できるものは主に東南アジアで古着として流通し、それ以外のものは工業用ウエス（雑巾）として再利用されることから、意外と重い衣類を、捨てずにリサイクルすることは、私たちができる持続可能な環境づくりへの一歩であると考えられる。

②弘前大学ひろエネ

昨今、エネルギーに関する地域住民の理解と行政政策のギャップが広がっています。対策や戦略では追いつき得ないほど、変動（Volatility）が激しく、不確実（Uncertainty）で複雑（Complexity）で曖昧（Ambiguity）になっているVUCA時代において、私たちが暮



らす弘前市でも、エネルギー意識啓発・理解促進が困難な課題になっています。

任意団体「ひろエネ」はエネルギーを題材に、未来の大人たちに対して、五感を活用したVAK(視覚・聴覚・体感覚)インプット、独自性・創造性を引き出すアウトプット、対話を通じたリフレクションの場づくりをしています。また、個人で着手できるような、創エネ・省エネ・消エネのノウハウを紹介し、それぞれの選択の幅を広げることをサブの目的に、課題解決に着手しています。

本発表では「親子でひろエネラボ ミニ省エネハウスをつくろう！」企画を中心に、活動を紹介します。

4. 会場の様子等

① 弘前大学いしてまい



② 弘前大学ひろエネ



5. 参加による成果・効果（学生委員会からの報告）

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン上でのブース展示やステージ発表による開催となった。これまでの対面でのブース発表や交流が出来なくなった反面、オンライン開催となったことで、経費の関係で函館にいけなかった学生団体が、ブース発表や函館の学生団体の活動内容を知ることが出来たことは、今後の弘前市内の学生団体にとってプラスに働いたと感じている。

6. 今後の活動に向けて

これまでは本コンソーシアムの学生委員会「いしてまい」が主に本事業へ参加していたが、今年度は2団体の弘前市内の学生団体が参加した。次年度の開催方法にもよるが、弘前市内の学生団体の活動を県外へさらに発信できるよう努めていきたい。

学生委員会「いしてまい」活動

1. 学生向け割引サービスを実施している飲食店調査及び発信事業

(1) 概要

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、弘前市内における学生の学習環境や課外活動は大きく制限を受け、アルバイトもままならず経済的に困っている学生も多い状況である。また、多くの飲食店が苦境に陥っている。

そこで、学生委員会「いしてまい」は、学生向け割引サービスを実施している飲食店情報をSNSに掲載することで、新入生を含め経済的に困っている学生に対して情報発信するとともに、弘前市内の地元飲食店の活性化に繋げることを目的に企画を立ち上げた。

(2) 方法

SNS上で散見している学生向け割引サービスの情報をピックアップし、実際に店舗へ出向いて試食及び取材を行いSNSに掲載する。あわせて、一覧で閲覧できるような媒体の作成を目指し、継続的な情報発信につとめる。

(3) 調査・発信時期

3月中旬頃～随時

(4) 新型コロナウイルス感染症対策

飲食を伴うため新型コロナウイルス感染症対策は十分に対策を講じる必要がある。具体的には以下の項目に注意し調査を行う。

- ・活動学生のスマートフォンに新型コロナウイルス接触確認アプリ（COCOA）をインストールする。
- ・日々の体温測定と行動履歴を記録し、活動時は毎回参加者名簿を作成する。
- ・手指消毒及びマスク着用、大声を発しないようにし、お互い距離を保ちつつ物品の共有は控える。
- ・徒歩や自転車移動を基本とし、公共交通機関利用時は混雑時間帯を避ける。

(5) SNS掲載記事



令和3年3月31日（水）
掲載記事



令和3年7月27日（火）
掲載記事

2. 衣類回収ボックス設置事業

(1) 目的

一昨年の衣類回収ボックス事業を通して、様々な意見が団体内外から挙がった。それらを踏まえ一度きりの活動ではなく、継続的な活動とする事でより本件の趣旨である『ゴミ問題への意識改革』に、弘前という場所を通して大いに貢献できると考え実施した。

○大学構内という環境を利用し、県内外出身者の学生に弘前市の活動をアピール。

○定期的な設置でリサイクルを身近に感じてもらい、それに対する行動のハードルの高さを低く出来る。(主なリサイクルショップは大学からかなり離れており、気軽に利用できない。その点で衣類回収ボックスの設置は大きな意義がある。)

○衣類回収ボックスの利用を通して環境・ゴミ問題を意識してもらう

(2) 実施スケジュール

- 06月28日(月) 弘前学院大学・弘前大学で宣伝開始(学生&教職員)
- 07月05日(月) 弘前大学へリサイクルボックス設置(弘前市環境課)
- 07月12日(月) 弘前学院大学へリサイクルボックス移動(弘前市環境課)
- 07月20日(火) リサイクルボックス回収(弘前市環境課)
- 10月01日(金) 弘前大学・弘前学院大学で再度宣伝開始(学生&教職員)
- 10月18日(月) 弘前大学へリサイクルボックス設置(弘前市環境課)
- 10月25日(月) 弘前学院大学へリサイクルボックス移動(弘前市環境課)
- 11月01日(月) リサイクルボックス回収(弘前市環境課)
- 11月30日(火) 活動内容のポスター等作成完了
- 12月前半～ 各イベント等で発表

(3) 回収した衣類の活用

使用できる製品は東南アジアにて古着としてリユースされ、使用できない衣類は工業用のウエス(雑巾)としてリユースされる。

(4) 衣類回収ボックス設置事業のチラシ

衣類回収ボックス 設置します!

弘前市環境課 弘前市学生委員会「いしてまい」活動

SDGという言葉を聞いたことはあるでしょうか? 世界中の国々が抱えている課題の一つに、環境問題があります。弘前市では、SDGの目標の一つである「持続可能な消費と生産」を推進するために、衣類回収ボックスを設置しています。回収した衣類は、再利用できるものは海外で古着として流通し、それ以外のものは工業用ウエス(雑巾)として再利用されます。

期間限定

弘前大学 大学会館3階エリア前
弘前3年7月5日(月)~7月11日(日)

弘前学院大学 1年新生ラウンジ広間
弘前3年7月12日(月)~7月20日(火)

回収するもの

ジャケット、シャツ、Tシャツ、ワンピース、ブラウス、ボロシャツ、パジャマ、トランパー、ジャージ、子ども服、スカーフ

回収しないもの

靴、靴下、帽子、バッグ、ベルト、タオル、ハンカチ、タオルケット、シーツ、枕、マットレス、敷物、マット、金銭類のものは回収していません。

今日からできる! 3キロ運動のススメ

① 衣類を3キロ... 食料を捨てず使い切る!
② 衣類を3キロ... 利用は美味しく食べ切る!
③ 衣類を3キロ... 生ゴミはしっかり水気を切る!

学生委員会「いしてまい」とは、弘前市内の大学に在籍する「弘前市を活性化させたい」という思いを持った学生が、弘前市を盛り上げるために活動しています。お問い合わせは以下へ(メンバーも随時募集しています)メール: isitemai@gmail.com

(5) 衣類回収結果



7月回収分



11月回収分

(6) 新聞記事



陸奥新報社提供
令和3年7月7日(水) 2面

3. 全体を通して

大学の実習や新型コロナウイルス感染拡大により、高学年を中心に活動に積極的に参加できなかったことや、未曾有の事態に対してオンラインの活用・企画内容の変更等で柔軟に対応できなかった。また、1年生も含めたメンバー全員で活動する機会も少なく、活動の引継ぎが思うようにいかなかった。加えて、外部イベント（函館アカデミックリンク、学生シンポジウム—あなたのいいねが世界を変える—等）に参加したものの、以降の活動のきっかけや、応援してくださる方の増加に繋げることができなかった。しかし、SNSを用いた飲食店紹介企画、大学構内における衣類回収BOXの設置等、小規模ながらも弘前市民・学生に対して貢献できた点は良かった。

来年度はオンラインも活用しつつ、現状の活動をブラッシュアップ・継続し、後輩へ活動の引継ぎをしていく。また、外部イベントにおいて得られたことを活動に生かす仕組みを作る必要があると感じた。

大学コンソーシアム学都ひろさき

令和３年度活動報告集

発行 令和４年３月３１日
編集 大学コンソーシアム学都ひろさき
印刷 やまと印刷株式会社
弘前市神田４丁目４－５
TEL ０１７２－３４－４１１１

構 成 機 関



弘前大学

〒036-8560 青森県弘前市文京町1
 [TEL] 0172-36-2111 (代表)
 [ホームページURL]
<https://www.hirosaki-u.ac.jp/>



弘前学院大学

〒036-8577 青森県弘前市稔町13-1
 [TEL] 0172-34-5211 (代表)
 [ホームページURL]
<https://www.hirogaku-u.ac.jp/>



柴田学園大学

〒036-8530 青森県弘前市清原1-1-16
 [TEL] 0172-33-2289 (代表)
 [ホームページURL]
<https://univ.shibata.ac.jp>



弘前医療福祉大学 弘前医療福祉大学短期大学部

〒036-8102 青森県弘前市小比内3-18-1
 [TEL] 0172-27-1001 (代表)
 [ホームページURL]
<https://www.hirosakiuhw.jp/>



放送大学 青森学習センター

〒036-8561 青森県弘前市文京町3
 弘前大学コラボ弘大7階
 [TEL] 0172-38-0500 (代表)
 [ホームページURL]
<https://www.sc.ouj.ac.jp/center/aomori/>

大学コンソーシアム学都ひろさき

〒036-8560 青森県弘前市文京町1 (弘前大学社会連携部社会連携課内)
 [TEL] 0172-39-3160 [FAX] 0172-39-3919 [E-mail] conso@hirosaki-u.ac.jp
<http://www.consortium-hirosaki.jp/>